

石川県埋蔵文化財情報

第 20 号

巻頭図版（五歩市遺跡、野々江本江寺遺跡、七尾城跡）

平成19年度県内発掘調査をふりかえって 所長 湯尻 修平..(1)

発掘調査略報

野々江本江寺遺跡(6)

飯田町遺跡(8)

三室福浦 C 遺跡・三室福浦古墳群(10)

七尾城跡(12)

太田ツツミダ遺跡(14)

畝田・寺中遺跡、畝田遺跡、畝田大徳川遺跡、畝田 B 遺跡(16)

元菊町遺跡(18)

二日市イシバチ遺跡(20)

五歩市遺跡(22)

分校 C 遺跡(27)

平成19年度下半期の遺物整理作業(28)

調査研究

古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討（その1） 田嶋 明人..(33)

2008年10月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

写真解説

五歩市遺跡 A区竪穴建物5

弥生時代後期に比定される竪穴建物である。平面形態は不整楕円形を呈し、長軸11.2m、短軸9.1m、検出面から床面までの深さは約60cmを測る。主柱穴は4本ないし6本で、中央にやや深めの土坑をもつ。管玉製作関連の遺物が多く出土しており、荒割段階から穿孔途中の破損品に至る様々な段階の未製品が、敲き石や軽石製砥石といった製作道具とともに多数確認された。

野々江本江寺遺跡 木製塔婆類出土状況

水田面から0.8~1.0mほどの深さでまとまって出土した。概ね北西-南東に方向を揃えており、木製板碑は碑面が上を向いた状態であった。



五歩市遺跡 A区竪穴建物5



野々江本江寺遺跡 木製塔婆類出土状況

写真解説

七尾城跡 調査区と七尾城下

「…家を山下に移し住む者、その数あまた、城府と軒を連ねて建ち並び、一里余りに及ぶ、呉のあやぎぬ・蜀のにしき、粟・米・塩・鉄などを行商する者あり、座売りする者ありで、これまさに「山市晴嵐」の景である」(『独楽亭記』解説文より)。七尾城が立地する通称「城山」の麓には、七尾城下が繁栄していた。

七尾城跡 本丸方向へ続く大手道

シッケ地区で確認された道路から、通称「門の高」を経てほぼ直線上に位置する。この先「高屋敷」へ突きあたり、尾根伝いに山城へと通じる七尾城下町のメインストリートである。



七尾城跡 調査区と七尾城下（東から）



七尾城跡 本丸方向へ続く大手道（北西から）

平成19年度県内発掘調査をふりかえって

所長 湯尻 修平

平成19年度は、県内全体で68件、約105,090㎡の調査が行われた。県センター19件、約41,035㎡、金沢城調査研究所5件、約3,760㎡、市町村43件、約60,265㎡、金沢学院大学1件、30㎡。開発事業に伴う緊急調査は51件、約92,390㎡であり、金沢城跡や能美市の秋常山古墳群など学術調査や史跡整備に伴う確認調査などが15件、約12,700㎡となりました。地域別では、奥能登（珠洲市、輪島市、鳳珠郡）8件、中能登（七尾市、羽咋市、鹿島郡、羽咋郡）13件、北加賀（金沢市、かほく市、河北郡）32件、南加賀（小松市、加賀市、白山市、能美市、石川郡）15件となっています。主な時代別の内訳では、縄文時代の遺跡が4件、弥生時代の遺跡が10件、古墳時代の遺跡が4件、古代（奈良・平安時代）の遺跡が27件、中世（鎌倉・室町・戦国時代）の遺跡が14件、近世（江戸時代）の遺跡が9件ありました。

平成19年3月25日午前9時42分、能登半島を襲った震度6強の大地震は大きな被害をもたらしています。文化財の被害は、5月時点での県文化財課による集計で国指定、県指定文化財の24件に達し、輪島市門前町の総持寺や黒島の角海家住宅など建造物への被害が特に大きかったようです。史跡では、国指定の石動山と七尾城跡の石垣や雨の宮古墳群の葺石の崩落・崩壊があり、穴水町の明泉寺鎌倉屋敷石塔群などの石造遺物の倒壊もありました。しかし、県や関係市町の努力により次第に復旧が進められてきています。埋蔵文化財では県センターが実施した七尾市の三室福浦古墳群・三室福浦C遺跡の発掘調査は、地震で崩落した急傾斜崩壊対策事業に起因しています。

県内の土木工事などに伴う事前の記録保存のための緊急調査は、ここ数年、国・県などが行う公共事業の見直し等により県・市町ともに減少してきています。平成19年度は、ここ10年来で最低の調査件数、調査量となって昭和60年代のいわゆるバブル経済以前の水準に戻ってきており、今後、北陸新幹線などに伴う発掘調査も予定されていますが、こうした傾向は今後数年続くものと思われます。一方、最近の特徴として発掘調査による地域の歴史遺産の見直しや、調査成果に対する関心の高まりとともにその件数が増加していることがあげられます。世界遺産登録にも関係して金沢城跡や白山の調査など、遺跡の整備・保護のための確認調査が進められていることもその表れといえるでしょう。

主な発掘調査の成果について、時代別に簡単に概要を紹介します。

縄文時代 白山市宮永雁堀遺跡は、宅地造成に伴う狭い範囲での調査でしたが晩期の土坑群が調査されています。金沢市直江北遺跡は、縄文時代から中世の規模の大きな集落遺跡で、区画整理に伴う調査が行われましたが、西と中調査区では縄文晩期（下野式期）の川跡が発掘され、多くの土器が出土しています。中調査区の川は幅約12m、深さ1mの大きな規模でした。輪島市塚田遺跡の調査は、平成18年度から始まりましたが、県内では例の少ない打製石器、磨製石器などの製作遺跡とみられる注目すべき遺跡でした。平成19年度の調査は地震対応のため一時中断の状況にありましたが、平成20年3月から再開されたようで、石器製作の技法解明に更なる成果が期待されています。史跡整備に伴う能登町真脇遺跡では、中期の貼り床建物跡2棟の再調査が継続されています。

弥生時代 区画整理事業に関係して継続調査が行われている野々市町二日市イシバチ遺跡では後期の竪穴建物が調査され、隣接する三日市A遺跡では弥生後期の竪穴建物7棟、円筒土坑40基、方形周溝墓1基が検出されています。道路建設に伴い調査が進められた五歩市遺跡は、弥生時代後期から古

墳時代前期の竪穴建物が10数棟検出されました。竪穴には後期後半頃の長軸11mの不正楕円形をし、深さ60cmに達する大型の竪穴と、一辺約8m×6mで深さ25cm程度と浅い隅丸長方形の二種類がみられ、建物の機能による構造を反映したものとみられています。この他金沢市北町遺跡、白山市福増遺跡、野々市町郷クボタ遺跡などで竪穴建物が検出されています。羽咋市太田ツツミダ遺跡では弥生後期の灌漑用の溝が何本か確認されましたが、うち1箇所には溝を横断する形で10数本の矢板が一行に打たれていました。水をせき止め別の溝へ流す目的で設置したようです。

古墳時代 金沢市畝田・寺中遺跡、金沢市直江北遺跡などの集落遺跡が調査されましたが、直江北遺跡の東調査区では前期または中期と考えられる掘立柱建物が多く見つかったほか、前期の集落を区画する溝が2条検出されています。1つは幅1m前後で、大量の土器の他、割り貫き円盤が出土しました。中期の井戸は枠に丸木舟の部材を転用した可能性のある材を2枚組み合わせてありました。加賀市松山D遺跡では古墳時代後期の円墳2基が検出されました。墳丘や主体部は既に削られて周溝のみの確認となりましたが直径16m程度の規模をもっています。近くに分布する分校古墳群と一連の古墳群の新たな発見として注目されます。能美市の国指定史跡秋常山古墳群は整備事業が進められており2号墳の復元と1号墳の墓石調査が行われました。

古代（奈良・平安時代）七尾市八幡大^{おおみなくち}皆^{ちの}口遺跡、千野林田遺跡、津幡町加茂遺跡、野々市町三日市A遺跡、粟田遺跡、小松市薬師遺跡、矢田新遺跡、松谷寺跡、二ツ梨豆岡向山古窯跡群などが調査され、竪穴建物、掘立柱建物跡や井戸跡、溝跡などが発掘されました。津幡町の加茂遺跡は、町が史跡指定に向けての範囲確認を実施してきていますが、広範囲にわたって掘立柱建物群が分布すること、古代の集落遺跡の成立が七世紀代となること、古代北陸道の延伸部分が確認されたことなど重要な発見が続いています。七尾市の千野林田遺跡は奈良後半から平安前半の集落跡で掘立柱建物群などが検出されています。大型土坑から出土した木製鞍の前輪と後輪はセットで、幅約40cm、高さ約20cm、厚さ5cmとやや小ぶりであるものの祭祀や農耕用に作られたとみられています。松谷寺跡は昨年度からの継続事業で中宮八院の一つの確認調査を行っていますが、全国でも最古期となる8世紀前半の礎石建物が検出されました。山林寺院の研究には重要な発見であり、11世紀後半から12世紀後半といわれる中宮八院の成立に対しても更なる解明の期待が寄せられます。薬師遺跡ではL字型カマドを付設するものを含めて竪穴建物が3棟、掘立柱建物1棟、土坑1基が発見されました。L字型カマドの竪穴は小松市内でも月津台地西部の額見町遺跡などで見つかっていましたが、薬師遺跡で先の平成17年調査に続いてL字型カマドが発見されたことで、月津台地の北東部でも分布していることがより一層明らかとなりました。野々市町粟田遺跡は古代の集落跡で、今年度の調査では竪穴建物7棟、掘立柱建物3棟と長さ60m、幅4.5mの道路遺構が検出されています。

中世（鎌倉・室町・戦国時代）集落遺跡では能登町五郎左工門分遺跡、野々市町三日市A遺跡、加賀市水田丸遺跡、分校C遺跡などが調査され、掘立柱建物跡や井戸跡、溝跡などが発掘されました。珠洲市^{のえぼんこうじ}野々江本江寺遺跡では平安時代末期から鎌倉時代前期の木製笠塔婆と板碑が全国で初めて出土して、大いに注目されました。笠塔婆などの形状は絵巻物『餓鬼草紙』（国宝・平安時代末期）に描かれた木製とみられる板碑などと同じ形をしており、中世の墓制や墓標の始まりを考える上で極めて貴重な資料といえます。さらに、これが珠洲で発見されたことは、絵巻物に描かれた都での墓地のあり方が地方にも直接的に伝わったことを物語っているようです。七尾城跡は、能越自動車道の橋脚の設置位置等を定めるための事前の確認調査を行いました。両側に石組み側溝を持ち、砂利舗装が行われた「大手道」や、総構の堀と切岸などが検出されたほか、屋敷地を区画する石垣や溝、井戸、布掘りの掘立柱建物群などが検出され、畠山氏の居城となった大規模な城の構造を明らかにする手懸かり

を得ることができました。松波城跡は畠山氏庶流の居城といわれ、枯山水の庭園があることで知られています。調査の結果、庭園と建物は、ほぼ同時期の16世紀後半に造られたことが判明しています。

松任城跡は過去の調査で江戸後期を中心とする加賀藩中出蔵があった時代の遺物が出土していました。本年度の調査では16世紀前半から中頃の遺構や遺物が検出され、一向一揆時代のもものと報告されています。記録では1575年に鍋木頼信の館（松任城）を山内衆が攻めると一揆内部の対立を窺わせるものがあり、青磁・白磁などの輸入陶磁器、越前・珠洲、土師器や小柄、小札などの鉄製武器・武具もこれに関係した遺物と見られています。白山市鳥越^{ふとげ}の二曲城跡では史跡整備に伴う発掘調査を続けてきていますが、虎口の確認や複数の掘立柱建物が検出されるなど成果がありました。能登町が行った五郎左工門分遺跡では12～16世紀にかけて続いた有力者の集落とみられ、太柄の黒漆塗り柄杓（14～15世紀）が出土しています。

近世（江戸時代）金沢城跡やその石垣の石材を切り出した戸室石切丁場跡をはじめ、金沢城下の辰巳用水や土清水塩硝蔵跡などが調査されました。金沢城跡は、河北門の復元整備に伴う調査、玉泉院丸の石垣修理に伴う調査、本丸で確認されている大型の遺構を対象とした調査、石川門の保存修理に伴う調査、いもり掘整備に伴う確認調査、堂形蔵屋敷・馬場（旧県庁舎跡地）の確認調査が行われました。河北門の調査では枅形や土塁、石垣の確認と変遷状況の把握が行われ、復元作業に向けて大きな成果を上げています。土清水塩硝蔵跡はトレンチ調査で遺構の遺存状態が良いことが判明し、明年度も継続調査をして範囲を確定することになっています。加賀市の九谷磁器窯跡では吉田屋窯跡の焼き口を確認したほか、色絵の顔料として使われた赤石を大量に含んだ地層を確認しています。

平成19年度の県内で実施した主な発掘調査の概要を紹介しましたが、平成20年度に入り県内の国指定史跡が2件増えて22件となりました。1つは珠洲市・能登町教委が平成12～18年度に行った総合的な悉皆調査の成果を受けて確認された、珠洲焼窯跡（十二支群）の全てが一括して「珠洲陶器窯跡」として国の史跡に指定されました。窯跡の全部を対象とした画期的な指定といえます。もう1つは同時に金沢城跡が国の史跡に指定されました。指定の範囲は、県が管理する金沢城公園内約27.5㏎となっています。

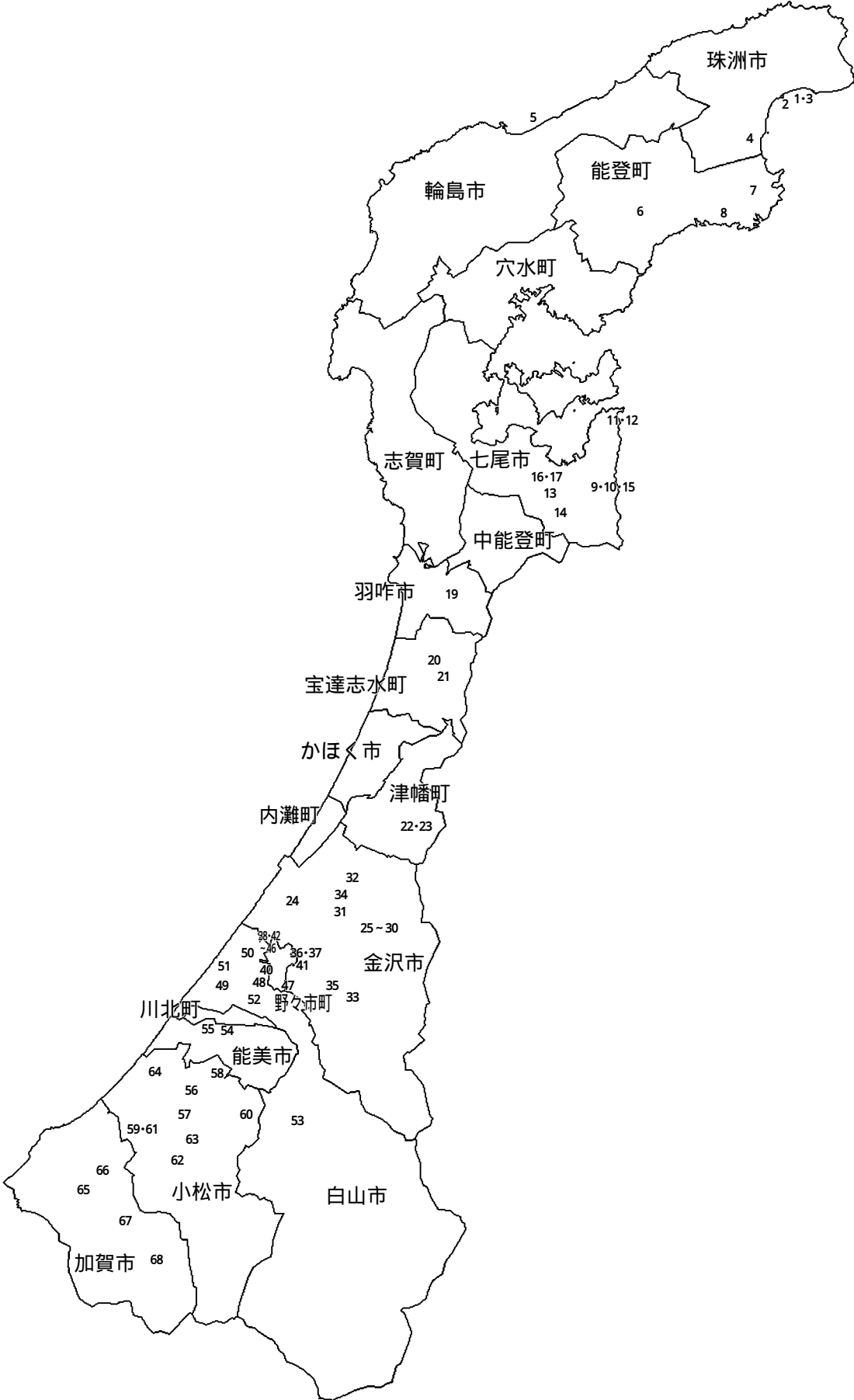


七尾城跡の現地説明会（12月1日）



加賀市東谷口小学校生徒による
発掘体験（加賀市水田丸遺跡）

平成19年度発掘調査遺跡位置図



番号	遺跡名	所在地	主な時代	調査原因	調査面積	担当	調査期間	遺跡の種類	特記事項
1	野々江本江寺遺跡	珠洲市野々江町	古墳、奈良、平安、鎌倉	ほ場整備	195	県・埋	10.9～11.9	集落跡	日本最古の木製板碑と木製空塔婆が出土
2	飯田町遺跡	珠洲市飯田町	中世、近世	道路建設	1,360	県・埋	9.4～12.6	集落跡	中・近世の掘立柱建物、井戸、炉跡などを検出、陶磁器類などが出土
3	野々江中町遺跡	珠洲市野々江町	古墳、平安	ほ場整備	420	市	11.2～12.14	集落跡	弥生、古代、中世の各時代の溝などの遺構を検出
4	高井コクマエダ A 遺跡	珠洲市室立町春日野	中世	ほ場整備	101	市	10.15～10.31	集落跡	古代・中世の土器が出土
5	塚田遺跡	輪島市塚田町	縄文、中世	道路建設	1,500	市	H18.6.6-H19.9.30	散布地	縄文の石器製作遺跡
6	五郎左門分遺跡	能登町寺分	中世	道路建設	700	町	5.28～8.10	集落跡	中世の掘立柱建物、井戸などを検出
7	松波城跡庭園跡	能登町松波	中世	確認調査	70	町	7.1～10.7	城館跡(城跡)	庭園と礎石建物跡を調査
8	真脇遺跡	能登町真脇	縄文	史跡整備	130	町	8.1～H20.3.31	集落跡	縄文中期貼床住居跡の調査
9	七尾城跡	七尾市古城町ほか	縄文、中世	道路建設	60	県・埋	5.31～7.19	集落跡、城館跡	掘立柱建物、土坑を検出
10	七尾城跡	七尾市古城町ほか	中世	道路建設	6,980	県・埋	4.17～H20.2.1	集落跡、城館跡	城の中心部に登る「大手道」を確認、総構城や切岸の存在が判明し、防禦ラインの構造が明らかとなる
11	三室福浦 C 遺跡	七尾市三室町	中世	砂防	30	県・埋	9.19～9.28	その他の墓(中世墓)	中世の記石墓
12	三室福浦古墳群	七尾市三室町	古墳、中世	砂防	130	県・埋	10.22～12.21	古墳、その他の墓	後期中世の石室石材が出土
13	八幡大旨口遺跡	七尾市八幡町	平安～中世	道路建設	400	市	5.10～11.22	集落跡	古代と中世の掘立柱建物や板塼、溝、大型土坑などを検出
14	千野林田遺跡	七尾市千野町	古墳、平安	道路建設	2,530	市	5.10～11.22	集落跡	古代の溝、土坑などを検出
15	七尾城跡	七尾市古屋敷町	中世	道路建設	300	市	7.23～10.31	城館跡	「大手道」の一部、土坑、掘立柱建物を検出
16	古府・国分遺跡	七尾市古府町ほか	奈良、平安	確認調査	60	市	8.27～10.18	集落跡	古代の建物の柱、溝などを検出
17	能登国分寺跡	七尾市国分町	奈良、平安	確認調査	94	市	3.11～3.31	寺院跡	国分寺の南面を画する一本柱列、溝などを確認
18	太田ツツミダ遺跡	羽咋市太田町	弥生～中世	道路建設	2,600	県・埋	9.3～11.15	集落跡	弥生後期の溝は横断方向に矢板が打たれ、灌漑に利用が
19	四柳白山下遺跡	羽咋市四柳町	奈良～中世	ほ場整備	460	市	5.7～8.2	集落跡	古代の土坑、溝などを検出
20	杉野屋遺跡	宝達志水町杉野屋	縄文～平安	河川改修	2,300	県・埋	4.12～8.17	集落跡	掘立柱建物、溝などを検出、古代の河道跡からは多くの土師器・須恵器とともに大型の加工木が出土
21	南吉田堂の後ろ遺跡	宝達志水町南吉田	平安～近世	ほ場整備	300	町	8.20～10.31	集落跡	古代と中世の掘立柱建物などを検出
22	加茂遺跡	津幡町加茂	縄文～中世	道路建設	500	県・埋	6.12～8.17	集落跡	道跡、溝、土坑などを確認
23	加茂遺跡・加茂廃寺	津幡町加茂	飛鳥、奈良、平安	確認調査	206	町	10.22～12.28	集落跡、社寺跡(寺跡)	古代北陸道の確認と加茂遺跡の古代集落の成立が七世紀代となることを確認
24	畝田・寺中遺跡、畝田遺跡、畝田大徳川遺跡、畝田B遺跡	金沢市畝田西、畝田中	弥生～中世	道路建設	2,000	県・埋	8.27～1.18	集落跡	弥生後期の竪穴建物、古代の掘立柱建物、土坑、溝、井戸などを検出
25	金沢城跡(玉泉院丸)	金沢市丸の内	近世	公園整備	390	県・城	4.26～9.21	城館跡(城跡)	石垣の解体調査
26	金沢城跡(石川門)	金沢市丸の内	近世	確認調査	200	県・城	5.17～12.20	城館跡(城跡)	石川門右方大鼓跡の基礎調査
27	金沢城跡(河北門)	金沢市丸の内	近世	確認調査	1,730	県・城	4.23～12.21	城館跡(城跡)	礎石の確認と絵図との検討
28	金沢城跡(いもり堀)	金沢市丸の内	近世	確認調査	48	県・城	9.3～9.25	城館跡(城跡)	南岸ライン及び断面形状の確認
29	金沢城跡(本丸・本丸付段)	金沢市丸の内	近世	確認調査	1,400	県・城	10.3～12.6	城館跡(城跡)	本丸北側大型遺構の規模確認
30	金沢城跡(県庁跡地)	金沢市広坂2丁目	奈良、平安、中世、近世	建物建設	600	県・埋	5.7～6.29	集落跡、城館跡	古代、中世から近世、近世の各段階の遺構面を確認
31	元菊町遺跡	金沢市三社町	近世	鉄道建設	2,800	県・埋	4.27～10.15	集落跡	近世の石組み遺構、土坑、道路跡などを検出、町屋の一角が判明
32	直江北遺跡	金沢市直江町へ14番地	奈良～奈良	区画整理	9,500	市	7.2～12.6	集落跡	縄文時代から奈良時代の規模の大きな集落跡、古墳時代初期の集落ではそれを区画する溝を確認
33	上辰巳南遺跡	金沢市上辰巳町壱	江戸	確認調査	10	市	8.1	その他(社会施設用水)	辰巳用水の確認
34	北町遺跡	金沢市北町	弥生	宅地造成	500	市	6.1～6.29	集落跡	弥生終末期の掘立柱建物を検出
35	末1号窯跡	金沢市末町	平安	確認調査	30	学院	5.15～7.20	生産遺跡(須恵器窯跡)	須恵器窯跡を確認
36	二日市イシバチ遺跡	野々市町二日市町	弥生、中世	鉄道建設	1,900	県・埋	10.2～H20.1.21	集落跡	弥生後期の竪穴建物、掘立柱建物、井戸、土坑などを検出
37	二日市イシバチ遺跡	野々市町二日市町	弥生、中世	河川改修	700	県・埋	11.7～H20.1.21	散布地	弥生後期の竪穴建物、土坑などを検出
38	三日市 A 遺跡	野々市町三日市町	縄文、奈良～中世	河川改修	490	県・埋	8.20～9.18	集落跡	古代の掘立柱建物、土坑、溝などを検出
39	末松遺跡	野々市町中林2丁目	奈良、平安	建物建設	2,300	県・埋	4.24～8.24	集落	古代と中世の掘立柱建物、竪穴遺構のほか、古墳の周溝遺構や墓とおぼしき集石遺構を検出
40	郷ヶ水夕遺跡(第3次)	野々市町郷郷町	弥生、古代、中世	区画整理	662	町	8.21～9.26	集落跡	弥生の竪穴建物2棟、古代の掘立柱建物4棟などを検出
41	二日市イシバチ遺跡(第4次)	野々市町二日市町	弥生、中世	区画整理	904	町	9.20～10.24	集落跡	弥生の竪穴建物1棟を検出
42	三日市 A 遺跡(第29・31次)	野々市町二日市町	弥生、奈良、平安、中世	区画整理	11,214	町	4.12～H20.2.21	集落跡	弥生後期の方形周溝墓1基、竪穴建物4棟、円筒土坑14基、溝1条、古代の竪穴建物1棟、溝1条、中世の掘立柱建物10棟、竪穴遺構7棟、井戸3基、土坑1基、溝23条などを検出
43	三日市 A 遺跡(30次)	野々市町三日市町	奈良、平安、中世、近世	区画整理	1,795	町	5.7～6.29	集落跡	古代の竪穴建物4棟、道路遺構、古代北陸道1カ所、中世の土坑墓2基などを検出
44	三日市 A 遺跡(第32次)	野々市町二日市町	弥生、古代、中世	区画整理	5,286	町	9.27～H20.1.31	集落跡	弥生後期の竪穴建物3棟、円筒土坑26基、古代の溝1条、中世の掘立柱建物5棟、竪穴遺構4カ所、土坑8基、溝2条などを検出
45	三日市 A 遺跡(第33次)	野々市町三日市町	縄文、古代、近世	区画整理	1,641	町	10.23～11.27	集落跡	古代の竪穴建物4棟、畝溝遺構多数を検出
46	三日市 A 遺跡(第34次)	野々市町二日市町	古代、中世	区画整理	402	町	12.10～12.27	集落跡	中世の竪穴遺構2、井戸1カ所などを検出
47	栗田遺跡(16次)	野々市町栗田5丁目	縄文、奈良、平安	工場建設	6,026	町	4.16～12.18	集落跡	古代の竪穴建物7棟、掘立柱建物4棟、道路遺構1カ所などを検出
48	五歩市遺跡	白山市五歩市町	弥生、古墳、中世	道路建設	12,510	県・埋	4.25～H20.2.20	集落跡	弥生後期から古墳前期の大型竪穴建物、土坑、溝と中世の礎石建物、区画溝を検出
49	松任城跡	白山市西新町204	奈良、室町、戦国	建物建設	674	市	8.7～9.8	城跡	古代～中世の集落跡、近世の城跡の一部を検出
50	福増遺跡	白山市福増町	弥生～中世	道路建設	3,600	市	5.9～11.20	集落	弥生時代の平地式建物、溝、土坑などを検出
51	宮永雁堀遺跡	白山市宮永町319、320	縄文	宅地造成	160	市	3.7～3.17	散布地	晩期の土坑群を検出
52	上二口遺跡	白山市三浦町	奈良、平安	道路建設	1,120	市	5.21～8.9	集落	古代の掘立柱建物、土坑などを検出
53	二曲城跡	白山市出合町	中世	史跡整備	225	市	7.24～11.30	城館跡(城郭)	掘立柱建物、石壁、空堀、土橋、堤状遺構を検出
54	西山古墳群(西山遺跡・西山中世墓・西山岩)	能美市高座町	弥生、(古墳)中世	遺跡整備	100	市	7.31～12.19	集落跡、墓、城館跡(弥生墓、中世墓、岩跡)	中世の土壘、曲輪、切岸を確認、西山4・5号墳は西山岩の土壘と判明
55	秋常山1号墳	能美市秋常町	古墳	史跡整備	30	市	6.18～9.3	古墳	前方後円墳の眞石を検出
56	上本折遺跡	小松市上本折町	古墳、奈良、平安、中世	道路建設	65	市	3.12～4.13	散布地	遺跡の縁辺部、古代の土師器、須恵器や中世の土師器、陶磁器が出土
57	薬師遺跡	小松市矢崎町	縄文、古墳～平安	住宅建設	125	市	4.9～5.9	集落跡、散布地	古代のL字型コマド付設竪穴建物を検出
58	白江遺跡	小松市白江町	弥生～中世	住宅建設	92	市	6.4～6.25	集落跡、散布地	古代の土師器、須恵器などが出土
59	矢田新遺跡	小松市矢田町夕15ほか	古墳、奈良、平安	住宅建設	200	市	5.21～7.12	集落跡	掘立柱建物3棟を検出
60	松谷寺跡	小松市五国寺町念仏寺	奈良、平安	確認調査	8,000	市	8.20～9.27	社寺跡(寺院)	北陸最古の山林寺院を確認、礎石建物を検出
61	矢田新遺跡	小松市矢田町夕16ほか	古墳、奈良、平安	住宅建設	22.96	市	10.29～11.5	集落跡	建物の柱穴を検出
62	二ツ梨豆岡向山古窯跡群	小松市二ツ梨町96	平安	農業関連	250	市	10.2～11.30	生産遺跡(窯跡)	竪穴建物跡、土坑、排水溝、灰原、炭窯を検出
63	矢崎宮の下遺跡	小松市矢崎町	縄文～中世	店舗兼住宅建設	108	市	11.15～12.10	集落跡	古代の竪穴建物3棟を検出
64	八日市地方遺跡	小松市日出町4丁目	弥生、中世	店舗建設	132	市	10.1～11.2	集落跡	中世土師器、中世陶磁器が出土
65	松山 D 遺跡	加賀市松山町	古墳	道路建設	2,030	県・埋	4.20～8.8	集落跡	弥生後期の土坑、溝、古墳後期の円墳周溝2基、平安時代の掘立柱建物などを検出
66	分校 C 遺跡	加賀市分校町	中世	道路建設	1,100	県・埋	8.20～11.8	集落跡	中・近世の掘立柱建物、墳墓、井戸などを検出、墳墓から銅製花瓶出土
67	水田丸遺跡	加賀市水田丸町	中世	道路建設	450	県・埋	5.1～6.8	集落跡	掘立柱建物、竪穴遺構、井戸などを検出
68	九谷磁器窯跡	加賀市山中温泉九谷町	近世	史跡整備	142.5	市	7.17～H20.3.31	生産遺跡(磁器窯跡)	吉田屋窯跡口、物原、掘立柱建物を検出

県・埋：(財)県埋文センター 全体 105,090.46㎡
 県・城：県金沢城調査研究所 うち県埋文センター 41,035㎡
 市・町：市及び町教育委員会(金沢市は市埋文センター) 県金沢城 3,768㎡
 学院：金沢学院大学

野々江本江寺遺跡

所在地 珠洲市野々江町地内

調査面積 195㎡

調査期間 平成19年10月9日～同年11月9日

調査担当 立原秀明 山下陽介



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・木製の出土例としては、全国最古となる平安時代末期～鎌倉時代前期の木製笠塔婆と木製板碑が出土した。
- ・木製笠塔婆と木製板碑は、『餓鬼草紙』に描かれた笠塔婆や板碑とほぼ同一形態のものである。
- ・木製塔婆から石製塔婆への変化を裏付ける重要な発見であり、我が国の墓制史研究上高い資料的価値を有する。

野々江本江寺遺跡は、能登半島の先端にある珠洲市野々江町に所在する。野々江町の地形

は、北方の丘陵と海岸部の平野からなり、遺跡は、海岸線から内陸へ500mほど入った標高約4mの平地に位置している。遺跡の周辺では、南方の海岸に沿って帯状の海岸砂丘があり、東方では、金川が飯田湾に注いでいる。このため、遺跡の南東側は、川と海岸砂丘によって形成された低湿地帯が広がっていたとみられる。

発掘調査は、県営ほ場整備事業に伴うものであり、調査地はA区とB区に分かれ、B区から注目される遺物として、木製笠塔婆2基と木製板碑1基が出土している。

A区は、標高4.2mの微高地に位置する。遺構は柱穴と小規模な溝を確認し、鎌倉時代前期を主体に室町時代(12世紀末期～15世紀前半)まで断続的に営まれた集落的な遺跡とみられる。

B区は、標高1.8mほどで、前述した低湿地帯の一角に位置している。土層断面の観察結果から、鎌倉時代における低湿地の埋め立てが行なわれたと推定している。木製塔婆類は、調査区の中央部付近で水田面から0.8～1.0mほどの深さでまとまって出土した。概ね北西-南東に方向を揃えた状況であった。他にも、少量の木製品や自然木が出土しており、一括的に廃棄されたものと考えられる。

木製笠塔婆は、竿の上部に笠がつき、正面には主尊を置いた額がつく構造と考えている。

木製笠塔婆1は、竿と額が出土している。竿は角柱状で、材質はスギである。下部は欠損しているが、高さ190.6cm、幅18.8cm、厚さ14.3cmである。上端には円柱状のほぞを造り出し、この部分に笠が取り付けられていたと考えられる。背面には、縦方向に高さ165cm以上、幅10cm、深さ6～8cmの溝が彫られている。この溝については、変形や亀裂を防ぐための「内挟り」とみている。

額は、高さ69.5cm、幅19.4cm、厚さ2.0cm、材質はアスナロである。本来は、3枚の合わせ板からなっていたとみられ、その中央部分と考えられる。上半には、直径33.8cmの円相を彫り、その中央には梵字「バン」(金剛界大日如来)を刻んでいる。円相の上下には、鋸歯文帯を配している。下半には4つの銘文区画を設け、願文あるいは偈が墨書されていたものとみられる。その一部は確認できるが、全体的に風化しており、解読については、今後の課題である。その下に蓮の花弁を図案化した火(花)頭形の飾りを造り出している。額の取り付けは、釘止めによるもので方形の釘穴が3ヶ所

認められる。

木製笠塔婆2は、上端のほぞは、腐朽のために確認できないが、背面に「内挟り」がみられることから竿と判断した。竿のみの出土で、高さ207cm、幅16.3cm、厚さ12.2cm、材質はスギである。下端から56.5cmを境に、その上下で腐食の差異が認められ、地中に埋められた痕跡と考えられる。

木製板碑は、一枚の板材から造り出したもので、下端は、切断により欠損している。高さ193cm、幅30.5cm、厚さ11.3cm、材質はヒノキである。頭部は高さ46cmで、山形の頂部、二段の羽刻みからなり、額部は長方形で塔身から3.5cmほど突出している。塔身は板状を呈し、高さ147.0cm、上部幅27.0cm、下部幅30.5cmで、下部に向けて幅が広がっている。碑面には、主尊などの信仰標識が彫刻されていないため、墨で梵字や銘文が墨書されていたと考えられるが、現時点では風化のために確認できない。

木製塔婆類は、現存する石製の笠塔婆や板碑、絵巻物と比較検討した結果、平安時代末期から鎌倉時代前期（12世紀後半～13世紀前半）に造られたと考えられる。これは、出土した珠洲焼の年代観ともほぼ対応する。

木製塔婆類は、『餓鬼草紙』に描かれた笠塔婆や板碑とほぼ同一形態のもので、その実物として全国初の出土である。これまでの笠塔婆や板碑の研究では、木製から石製へ変化したと推定されていたが、今回の出土によってこれが裏づけられた。中世初期の墓制や墓標の初源を考えるうえで極めて貴重な資料が得られたといえよう。

木製笠塔婆類を造立した人は、珠洲郡の有力な在地領主と考えられる。また、出土地点の近くには、墓地が存在した可能性が高く、当地を支配していた領主によって造立されたものと考えている。

(立原秀明)



木製笠塔婆1の額出土状況



木製笠塔婆1の竿出土状況



木製笠塔婆2の竿出土状況



木製板碑の出土状況

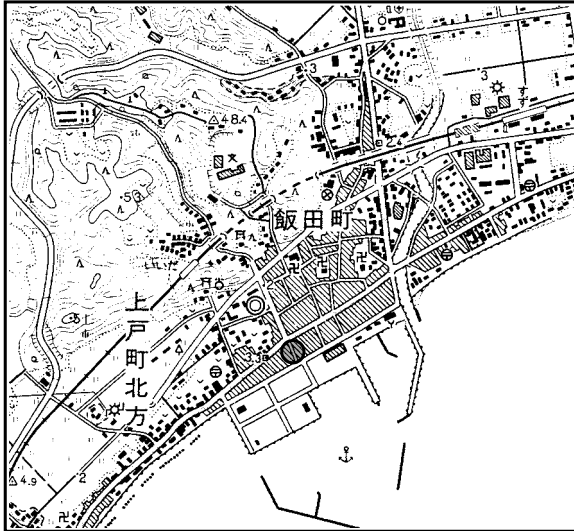
飯田町遺跡

所在地 珠洲市飯田町地内

調査面積 1,360㎡

調査期間 平成19年9月4日～同年12月6日

調査担当 白田義彦 中泉絵美子



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・遺跡は珠洲市の中心市街地である飯田町に位置し、本調査区は当時の海辺に立地する。
- ・主に近世（17世紀後半～18世紀）の集落跡を確認した。
- ・主な遺構は近世の柱穴、井戸、土坑、炉跡などであり、井戸枠材はこの地域特産の珪藻土を利用したものであった。炉跡は大型のものであり、海産物加工用のものである可能性が高い。

飯田町遺跡は珠洲市の中心市街地である飯田町に所在する平安時代～近世を主体とする遺跡である。本遺跡は過去に3回調査されており、その成果は1992年の『飯田町遺跡』と2008年『珠洲市飯田町遺跡』としてまとめられている。今回の調査原因は飯田港と春日神社を結ぶ「春日通り」の拡幅によるものであり、上記『珠洲市飯田町遺跡』の調査原因と同一のものである。今回は本センターが以前調査した調査区の南側にあたる部分の調査を行い、平成20年度に今回調査した調査区の北隣の調査をもつて、春日通り拡幅工事に伴う現地発掘調査を終了する予定である。

これまでの調査で、平安時代・中世の遺構は春日神社に近い山側の調査区に多く確認され、海側へ向かうにつれ、近世の遺構が多くなり、中世の遺構は少なくなるという傾向が指摘されていた。今回の調査区は海に近い調査区であり、中世の遺構は少なく、遺構の主体は近世（17世紀後半～18世紀）のものである。

主な遺構は柱穴、井戸、土坑、炉跡などであり、珠洲市にみられる泥岩の珪藻土ブロック積み井戸を3基検出した。同市の粟津小学校遺跡では、中世の珪藻土ブロック積み井戸を確認しており、現在でも珪藻土ブロック積み井戸は利用されていることから、この地域特産の珪藻土が中世から現代まで井戸枠材として利用されているようである。炉跡は近世のものと考えられ、2基隣接して確認した。東側の炉跡は約1.7m×2.0mの方形状のもので、一部に石囲いがみられ、床面は橙色に焼けていた。西側の炉跡は約2.5m×2.8mのもので、一部に珪藻土ブロック囲いがみられた。この2基の炉跡の焼土面がつながっていたことから、一連の遺構であると考えられる。近隣住民の方の話では近年までこのあたりで煮干しなどの海産物を製造していたそうである。検出した炉跡も大型であり、海に近いことから、海産物製造用のものである可能性が高いと考えられる。

これまでの調査で飯田町遺跡の形成過程が明らかになりつつあったが、今回の調査で近世の海辺の集落の様相が垣間みれた。中世から近世、そして現代へと続く集落の変遷が追える貴重な遺跡である。

(白田義彦)



東側調査区完掘状況



西側調査区完掘状況



井戸1 (珪藻土ブロック積み)



井戸2 (珪藻土ブロック積み)



井戸枠 (珪藻土ブロックと小木石)



井戸枠 (小木石)



炉跡完掘状況



炉跡下部構造 (礫床)

三室福浦C遺跡・三室福浦古墳群

所在地 七尾市三室町福浦地内

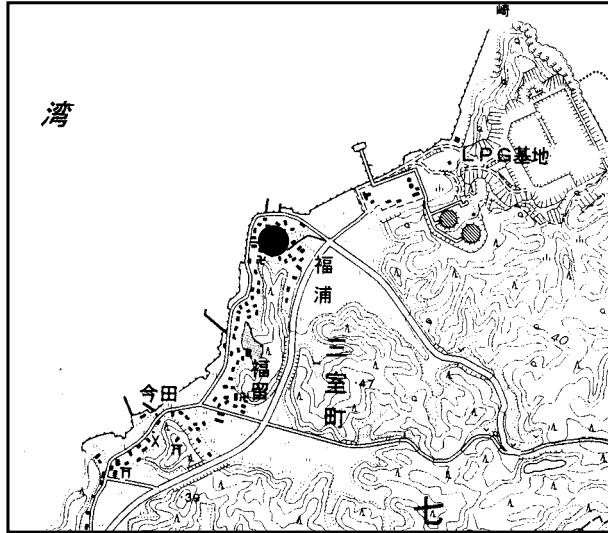
調査担当 安中哲徳 山下陽介

三室福浦C遺跡 調査面積 30㎡

調査期間 平成19年9月19日～同年9月28日

三室福浦古墳群 調査面積 130㎡

調査期間 平成19年10月22日～同年12月21日



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・遺跡は、七尾南湾に面した崎山半島西側の南から北へ派生する低丘陵先端に立地。
- ・尾根頂部付近に中世の配石・集石遺構が複数確認され、銅銭や珠洲焼が出土。
- ・約30m離れた尾根頂部の2箇所で見つかった古墳の横穴式石室石材や古墳時代終末期の須恵器を確認。
- ・2号墳は斜面の自然崩壊や後世の攪乱により石室が崩落。原位置を保つ石材は未確認。

三室福浦C遺跡 丘陵斜面は自然崩壊や後世の土取りにより大きく削平されていたが、尾根頂部付近の表土直下からは、複数の配石・集石遺構が確認された。

1号墓とした尾根北側頂部には拳大～人頭大の石材を円形に配した径約1.2mの配石遺構が確認された。石材は古墳石室石材と同じ物で、小型の物を転用した可能性が高い。周辺には銅銭や珠洲焼も出土したことから、中世の塚状遺構が存在していたと考えているが、集落の共同アンテナ電柱が接していたことから今回の調査では配石下の掘削はできなかった。周辺には小規模な集石遺構が複数確認されたが、斜面の表土流出が著しいため実際には何基存在していたかは不明である。

2号墓とした尾根南側頂部では斜面を円形に整形した径約8mの塚状遺構が確認された。頂部には一辺約1mの方形の配石遺構が確認され、配石下には一辺約80cm、深さ約30cmの方形の土坑が存在したが、遺物の出土は無く時期は不明である。また、南側斜面上部にも集石遺構が確認され、流土中からは珠洲焼が出土したことから、中世の塚状遺構が複数存在していたと考えている。

三室福浦古墳群 三室福浦C遺跡の調査着手後、北側の塚状遺構の下層部分及び約30m離れた南側斜面の2箇所で見つかった古墳の石室石材の可能性が高い砂岩製海石や安山岩製板石が多く確認された。周辺からは古墳時代終末期の須恵器も出土し、尾根上に古墳の存在が明らかとなったことから、調査を一時終了し、南側斜面で確認された三室福浦古墳群(2号墳)の調査を優先して行うことになった。

1号墳は尾根北側頂部の塚状遺構の下層に存在する。天井石か側壁の可能性が高い大型の石室石材や小型の板石が確認され、表土中から古墳時代終末期の須恵器が出土した。7世紀代の横穴式石室を持つ古墳が存在すると考えているが、今回は発掘調査を行わなかった。

2号墳は尾根南側頂部から南側斜面の上部付近にかけて存在していたと考えられ、斜面の広範囲で確認された石材には、石室の天井石や側壁、門柱石などの可能性がある大型の石材も多数含まれている。また、尾根頂部から南側斜面にかけての流土中からは、古墳時代終末期の須恵器や土師器が多く出土している。7世紀代の横穴式石室が存在していたと考えているが、斜面の自然崩壊や後世の攪乱により石室が完全に崩壊しており、原位置を保つ石材は確認できなかった。(安中哲徳)



遺跡遠景（南から）



1号墓配石検出状況（南西から）



1号墳石室石材検出作業（南西から）



1号墳石室石材検出状況（南東から）



2号墓配石検出状況（南から）



2号墳石室石材検出作業（南東から）



2号墳石室石材検出状況（南から）



2号墳完掘状況（南東から）

七尾城跡

所在地 七尾市古城町、古屋敷町、竹町地内 調査期間 平成19年4月17日～平成20年2月1日
調査面積 7,040㎡ 調査担当 夷藤明 中屋克彦 金山哲哉 空良寛 松原秀浩



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・石組みの両側側溝を持ち、砂利敷き舗装が施された「大手道」を検出。
- ・堀と切岸で構成される「総構」を検出。
- ・石垣などによる屋敷割りの一部を検出。
- ・「永禄」銘の石造狛犬台座や線画が刻まれた硯のほか、土師器、陶磁器、銅銭、漆器などの遺物が多数出土。

七尾城は、標高約300mの本丸を中心に、尾根筋にいくつもの曲輪が設けられた山城である。近年、その状況が少しずつ明らかになってきた城下とあわせ、一連の遺構群が非常に良く残っていることなどから、戦国期の城下町遺跡として全国的にも高い評価を受けている。

今回の発掘調査は、一般国道470号能越自動車道（七尾氷見道路）建設に係るもので、平成17年度から実施しているものである。

平成19年度の調査対象は、市道矢田郷80号線から矢田町地内の山裾までの道路建設予定地内

である。このうち、市道矢田郷80号線と木落川に挟まれた丘陵上に多くの遺構を確認した。

丘陵の尾根筋を通る現林道と重複する位置には、砂利敷き舗装された幅3mの「大手道」が検出された。道の両側には石組みの側溝が整備され、路面を横断する溝も検出されている。



七尾城下町と現在の七尾市街（南から）

また、市道矢田郷80号線沿いの区域では、堀と切岸で構成される総構が確認されたほか、総構が途切れている部分に、城戸の内と外を繋ぐ出入口(虎口)の存在が推定されることとなった。これらは、七尾城下町の都市計画や区割りの基幹となった遺構であると考えられる。「大手道」の周辺では、石垣で区画された屋敷地が確認されたほか、約4m四方の大型竪穴状遺構や布掘りの基礎構造を持つ

掘立柱建物などが検出され、丘陵上一帯に畠山氏の家臣などが屋敷を構えていたと考えられる。

これらのことから、市道矢田郷80号線と木落川に挟まれた区域は、城下の形成や構造などを検討するうえで重要な区域であると考えられる。

また、木落川から東側の区域についても、石組み井戸などの遺構が検出されていることなどから城下の一角であったと考えられるが、全体として比較的遺構密度が低いことなどから、木落川が総構としての機能を有し、七尾城東側の防御線をなしていたものと推定される。

主な出土品には、土師器、陶磁器のほか、碁石、銅銭、「永禄」銘の狛犬台座、裏面に絵が刻まれた硯、漆器などがある。 (中屋克彦)



総構の堀と切岸



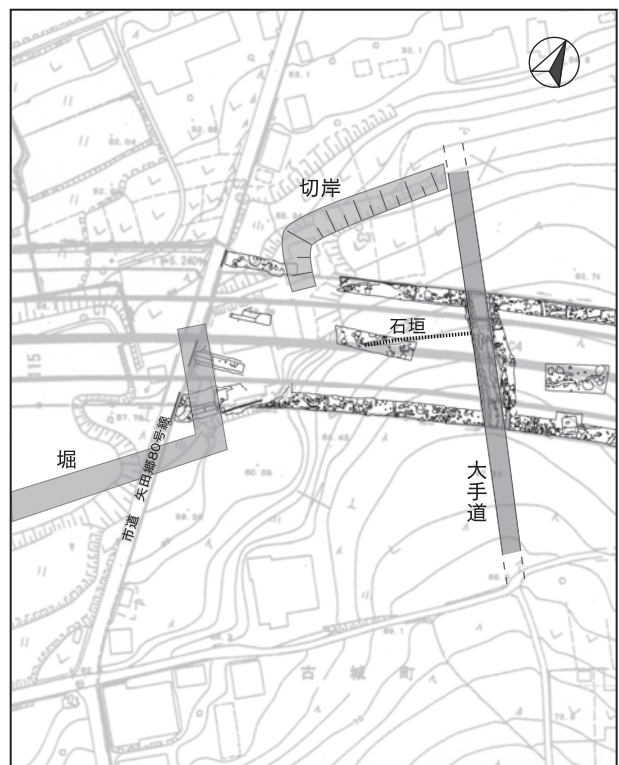
屋敷地を区画する石垣 (西から)



大型の竪穴状遺構 (東から)



大量に出土した土師器皿



大手道と総構周辺 (S = 1 / 2,000)

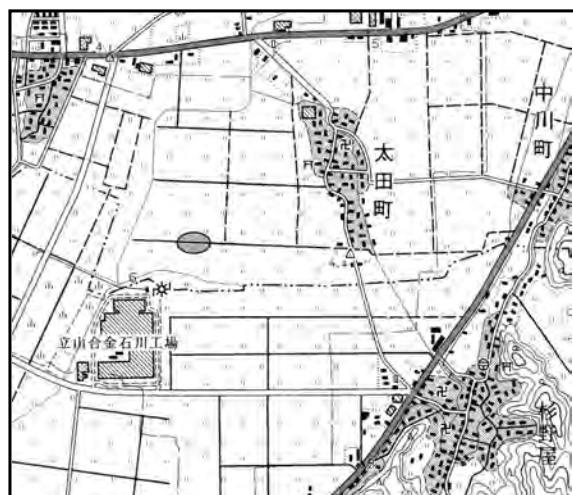
おお 太 田 ツ ツ ミ ダ 遺 跡

所在地 羽咋市太田町地内

調査面積 2,600㎡

調査期間 平成19年9月3日～同年11月15日

調査担当 澤辺利明 中本武志



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・ 弥生時代後期後半および奈良・平安時代の集落跡であり、2カ所で建物を確認したほか、水路跡とみられる溝多数を検出した。
- ・ 建物のうち1棟は弥生時代の竪穴系建物、もう1棟は古代の掘立柱建物の可能性がある。
- ・ 弥生時代後期後半の溝の一つ (SD5) には堰が遺存していた。

能登半島基部には邑知地溝帯が東西にのび半島を南北に分断する。この地溝帯南西部には干拓により縮小したものの、かつては県内第2の規模を

誇った邑知潟が広がっている。遺跡は地溝帯南西端にあつて、子浦川をはじめ南の宝達山系から北流し邑知潟に流れ込む大小河川によって形成された沖積地に位置する。

発掘調査は一般国道415号道路改良工事に伴うもので、昨年度までに調査地東側で太田A遺跡や太田B遺跡などが調査され、弥生時代～近世にいたる集落跡が確認されている。また、本遺跡に係つては、工場拡幅に伴い平成4年度に羽咋市教育委員会により、一帯のほ場整備に伴い平成16・17年度に道路隣接地で当センターにより発掘調査が実施されている。

今回の調査では、2カ所で建物柱穴群を、調査区東半部で幅約0.3～2m、深さ約0.1～1mの溝多数を確認した。西半部は遺構希薄であつた。

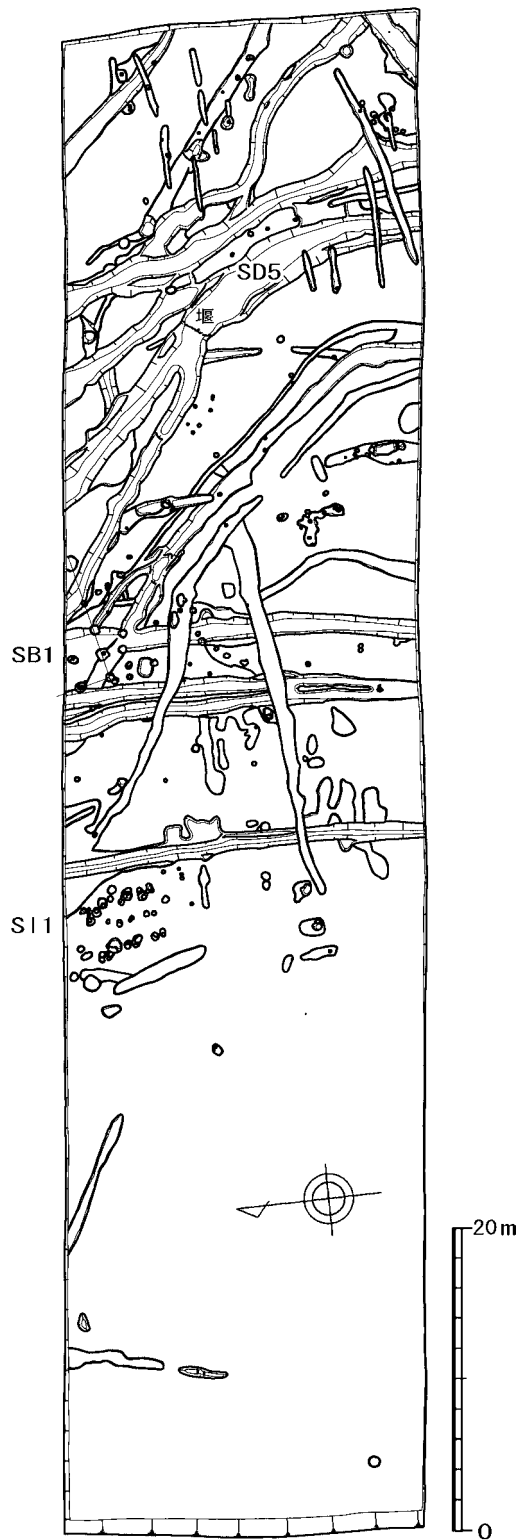
建物の時期を確定できる遺物はないが、調査区中央北壁に接して東西方向に桁行を向ける掘立柱建物 (SB1) は、ほ場整備調査区中検出の掘立柱建物と軸を同じくすることから古代に属する可能性がある。また、西半部で検出された柱穴群については、周囲の溝とあわせ竪穴系建物 (SI1) をなすともみられ、弥生時代後期後半に属する可能性がある。溝は弥生時代後期後半と古代に分けられ、周辺に分布した水田等耕作地に伴う水路が多いとみている。うち幅約3m、深さ約1mの溝 (SD5) 内には矢板を並べた堰が遺存していた。弥生期の所産であり、矢板が1m近く打ち込まれていたこと



遺跡遠景 (南東から)

から恒常的施設とみられ、横板を外すことにより水の分岐や流量調節を図つたと思われる。当期において錯綜して溝群が掘削される状況は、調査地南西約300mに位置する二口かみあれた遺跡でも知られる。本遺跡について伴出遺物は少ないが、あわせ各遺構の変遷を検討することで、弥生時代後期後半から活発化する邑知潟南西部低地における開発の様相を示すことが可能となろう。

(澤辺利明)



調査区全体図 (S = 1 / 500)



東半部完掘状況 (東から)



SI1完掘状況 (北から)



溝群完掘状況 (北から)



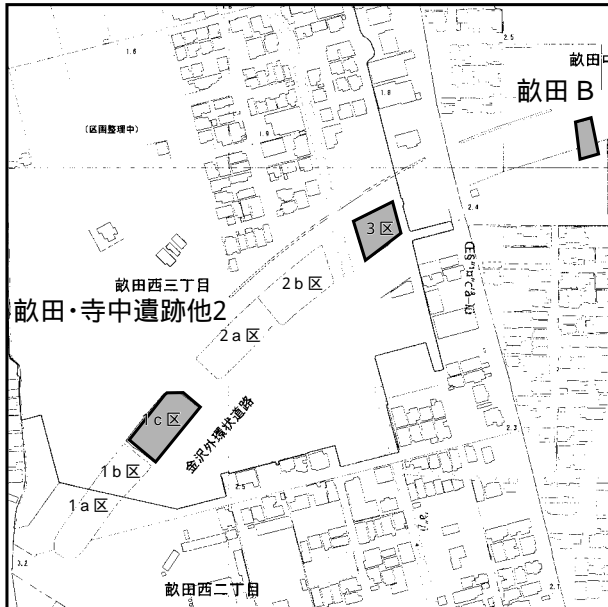
SD5内堰検出状況 (北西から)

うねだ しちゅう だいとくがわ
 畝田・寺中遺跡、畝田遺跡、畝田大徳川遺跡、畝田B遺跡

所在地 金沢市畝田西3丁目・畝田中3丁目 調査期間 平成19年8月27日～平成20年1月18日
 調査面積 2,000m² 調査担当 土屋宣雄 宮川勝次



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



調査区位置図 (S = 1 / 5,000)

調査成果の要点

- ・ 弥生時代から中世にかけての集落跡を確認した。
- ・ 弥生・古墳時代では、竪穴系建物、土坑、溝など、古代にかけては河道や掘立柱建物を確認した。
- ・ 中世では縦板組横棧留め及び曲物を有する井戸や溝などを確認した。
- ・ 弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、木製品、石製品が出土した。

畝田・寺中遺跡他2遺跡（畝田遺跡、畝田大徳川遺跡も含む）と畝田B遺跡は金沢市西部の沖積平野に立地する集落跡である。発掘調査は一般国道305号線（海側幹線）改築工事を原因とするものであり、昨年度（当誌第18号掲載）から継続して実施しており、今回は1c区・3区（畝田・寺中遺跡他2遺跡）及び畝田B遺跡を対象とする。なお、調査区の一部は金沢西部第二土地区画整理事業に係る調査地に隣接する。以下、調査区ごとに概略を述べる。

1c区 弥生時代から中世にかけての遺構・遺物を確認した。弥生時代終末期から古墳時代前期の竪穴系建物、古墳時代中・後期の土坑や溝、調査区中央部で南北に走る古墳時代から古代にかけての河道や掘立柱建物を確認し、弥生土器、土師器、須恵器が出土した。なかでも河道からは土器の他に弓、木槌などの木製品が多量に出土した。中世では上記河道より西部を中心に井戸跡が確認でき、井戸側を持つものとし

ては曲物を2・3段積み上げたもの、曲物と縦板組横棧留めがセットになったものが認められ、珠洲焼や土師器皿が出土した。

3区 調査区の西半部は河道で占められ、東部及び南部において古墳時代から古代にかけての土坑や小穴、中世と思われる溝を確認した。主に土師器や須恵器が出土した。

畝田B遺跡 遺跡の西端に位置する。古代の掘立柱建物や溝などが確認でき、土師器、須恵器が出土した。

（宮川勝次）



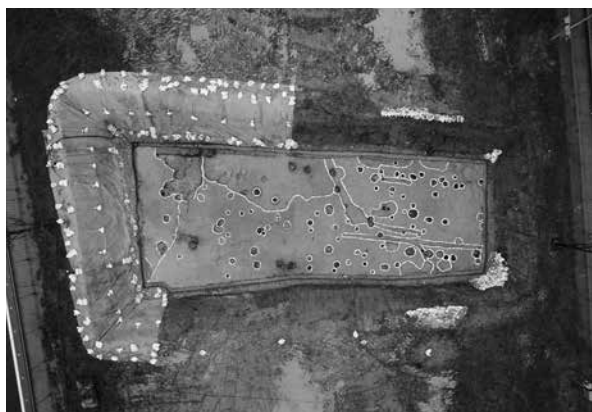
遺跡遠景（南西から）



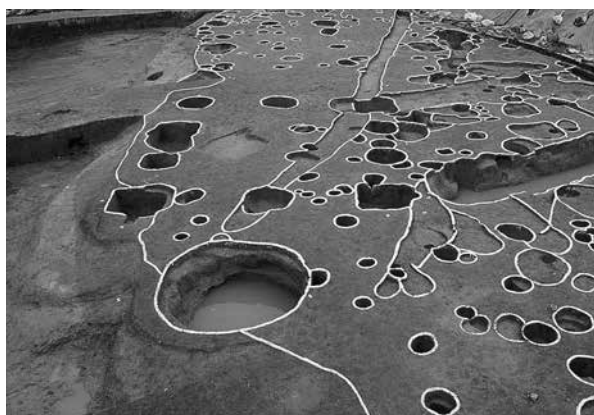
1c区 全景（上が北西）



3区 全景（上が西）



調査区（畝田B遺跡）全景（上が西）



1c区 掘立柱建物（南東から）



1c区 井戸側出土状況



1c区 土器出土状況（北から）

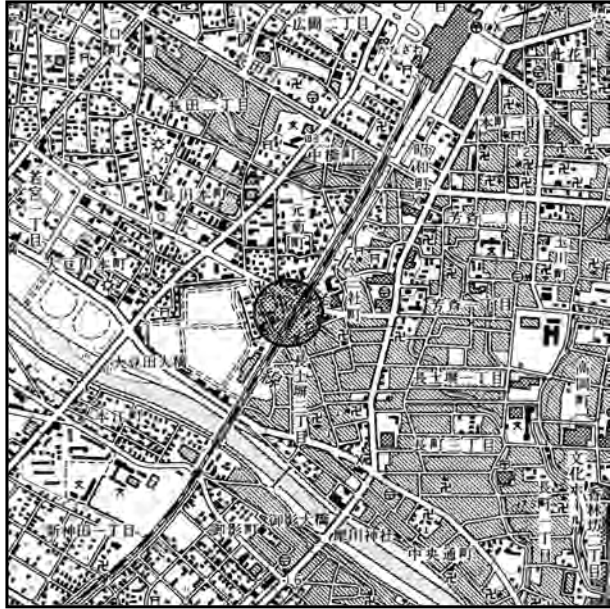


3区 河道 木製品出土状況（東から）

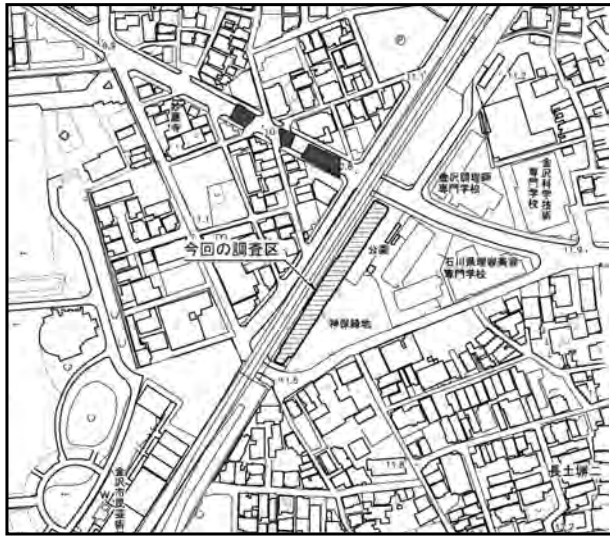
もとぎくちよう
元菊町遺跡

所在地 金沢市三社町地内
調査面積 2,800㎡

調査期間 平成19年4月27日～同年10月15日
調査担当 安英樹 立原秀明



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



調査区位置図 (S = 1 / 5,000) 濃アミは過去の調査区

調査成果の要点

- ・部分的だが3面の遺構面を確認した。
- ・多数の石組遺構を検出した。
- ・大量の陶磁器が出土した。
- ・金沢城下町の一部である。
- ・絵図によれば近世前半は百姓地である。
- ・絵図によれば近世後半は町屋である。
- ・第1～3面の状況は絵図の城下町と対応するが、絵図の歪みや誇張には注意が必要である。

元菊町遺跡は金沢市の市街地北西部に位置する。昭和62(1987)年に金沢市元菊町地内で発見され、同年度と平成元(1989)年度に石川県立埋蔵文化財センターにより、発掘調査が行われている。調査では、土坑、溝、落ち込み等の遺構を検出し、近世の陶磁器や土製品が出土した。さらに、絵図面との対比によって、金沢城下町の一部であることが確認されている。今回の発掘調査は北陸新幹線の建設工事を調査原因としており、JR北陸本線の南側で実施したものである。

調査区の層序は、上位から厚さ1m前後の盛土、遺物包含層、整地土、地山を認識した。地山は砂礫層であり、旧犀川に由来することが推定される。整地土は凹凸のある旧地形を整地するものであるが、不連続・不均一であり、単一層とはいえない。遺構面は複数確認でき、遺

物包含層直下で検出したものを第1面、整地土中ないし整地土下で検出したものを第2面、さらに下層から検出されたものを第3面とした。遺構検出面の標高は10～11mである。

遺構は道路状遺構、溝、土坑、小穴、落ち込みの他、多数の石組遺構(SS)を検出した。これら遺構の組み合わせで形成される区画内には建物が存在した可能性が高いが、認識できなかった。道路状遺構の1基は南西-北東方向に伸びる延長約30mを検出しており、南西側では交差して十字路となっている。幅は1間(1.8m)と判断でき、3回以上の改修が確認される。土坑のうち1基(SK7)は径0.8m・深さ1.4mの円筒形で、側壁に木質が遺存していた。井戸の可能性が高い。遺物は土師器、陶磁器、土製品、石製品、金属製品、木製品が出土した。特に陶磁器は大量に出土している。時期的

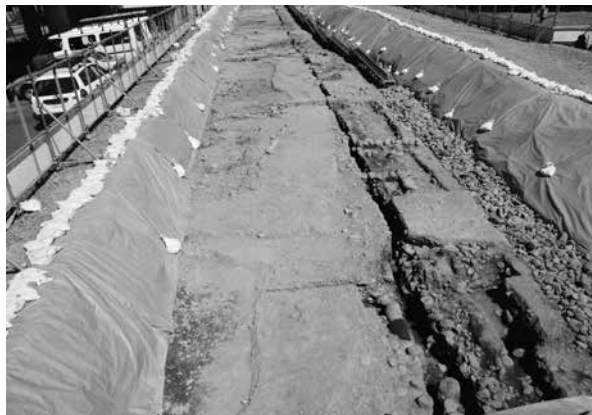
には18世紀後半以降が主体であり、18世紀前半以前は少ない。

石組遺構は今回の発掘調査を印象付ける存在である。石の構成は石敷、石列、石組溝など、特徴的であるが多様であり、代表的な例と現状で想定される性格を示しておく。SS 6は一定の範囲に石を敷き詰めたものであり、庭地の一部。SS 7・8は帯状に石を盛り上げており、垣根の基礎。SS35fは石の面を内向きに並列したものであり、排水溝。SS35gは逆に外向きに並列しており、土塀の基礎。SS 4は1列であるが、溝SD 2が並走しており、簡易な塀であろうか。この他では、区画となりそうな石列が多い。

遺構面の別では第1面が遺構・遺物の主体となる。道路とその周囲の細かい区画が確認でき、城下町の町屋と推定できる。第2面は確認された地点、遺構、遺物とも限定され、第1面よりも希薄な状況であるが、近世前半に遡る遺構・遺物を含んでいる。道路もこの段階まで遡る可能性がある。第3面は第2面の分布範囲の中でさらに部分的にしか確認できていない。第2面との時間差は相対的なものであり、第2面の遺構密度が高い地点と考えた方が適切かもしれない。

調査地点の周辺は、城下町の絵図によれば、近世前半(「延宝金沢図」など)は百姓地となっており、後半(「金沢町絵図」など)は家屋敷が立ち並び町屋となっている。調査状況と対照すれば第1面が近世後半、第2面と第3面が近世前半の状況と整合しており、当時の百姓地と町屋にほぼ比定できよう。城下町の変化は発掘調査でもある程度裏付けられることになる。一方で、遺構が多かった第1面には絵図と一致しない部分も多く、絵図に歪みや誇張があって、特に本遺跡のような城下町の縁辺部で顕著なことが予想される。今後、遺物の整理ともあわせて検討を重ねる必要がある。

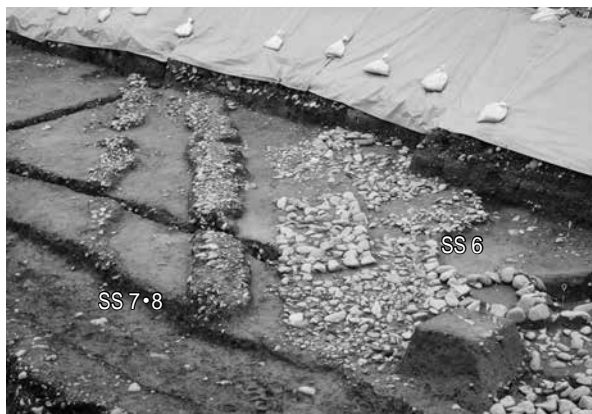
(安 英樹)



道路状遺構



SS 4・SD 2



SS 6 ~ 8

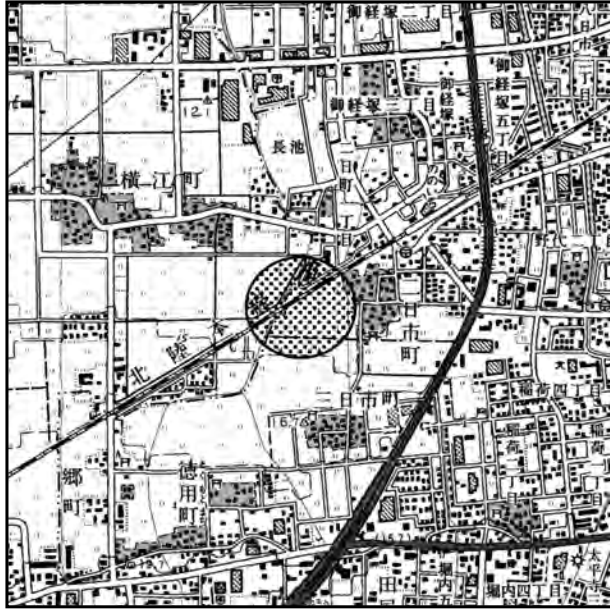


SS35

ふつかいち 二日市イシバチ遺跡

所在地 野々市町二日市町地内
調査面積 2,600㎡

調査期間 平成19年10月2日～平成20年1月21日
調査担当 安英樹 立原秀明 安中哲徳 山下陽介



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



調査区位置図 (S = 1 / 5,000)

調査成果の要点

- ・ 弥生時代と中世が複合した遺跡である。
- ・ 弥生時代は後期の集落である。
- ・ 弥生時代の遺構・遺物は南西側に偏在する。
- ・ 中世は14世紀代を中心とする村落である。
- ・ 中世の遺構・遺物は広域に分布する。

二日市イシバチ遺跡は野々市町の北端部で、白山市との市町境近くに位置する。一帯は手取扇状地の扇中部にあたり、耕地化が進んで地勢は平坦である。遺跡は昭和59(1984)年度に発見されており、野々市町教育委員会が平成4(1992)～6(1994)年度にかけてJR北陸本線の北側で、さらに平成18(2006)年度からはその南側で発掘調査を行っている。調査では弥生時代後期と中世の遺構・遺物が確認されており、それぞれの時代の集落跡であったことが判明している。また、平成18年度の調査では古墳時代前期の古墳群も確認されており、遺跡に新たな性格を加えている。

今回の発掘調査は北陸新幹線の建設と安原川の河川改修という二つの開発事業に起因している。前者の調査区はJR北陸本線の南側に平行し、馬場川と安原川の両河川に挟まれる細長い範囲である。後者の調査区は安原川に接してより上流側に位置する。厳密には、前者の調査区にも後者の工事区域が一部含まれるのであるが、記述が煩雑になるので、この略報では前者を新幹線調査区、後者を河川調査区と表現し

て、それぞれの成果を紹介することにしたい。なお、両調査区は前述した野々市町教育委員会の南北調査区の間位置することになる。

遺構は竪穴住居2棟、掘立柱建物2棟、井戸1基、溝13条、土坑4基、落ち込み3基、小穴約40基等を検出した。遺物は弥生土器、中世土師器、陶磁器、石製品等が出土しており、時期は弥生時代後期と14世紀代である。調査面積からみれば遺構・遺物ともに少量であり、希薄な状況といえよう。

新幹線調査区では、北東-南西方向に細長い線形のほぼ中央部分が鞍部地形で、その両岸となる微高地に遺構・遺物が分布している。北東側では掘立柱建物、溝、土坑等の遺構が比較的まとまった配

置で検出されており、形状や出土遺物から、区画溝をもつ中世村落の一部と判断できる。南東側では弥生時代と中世の遺構・遺物が存在する。弥生時代は後期の竪穴住居、土坑、溝が検出された。竪穴住居と土坑は約3mの距離に近接する。竪穴住居は径約7mの円形プランで、2基の主柱穴に推定4基の副柱穴が伴う。土坑は1.4×1mの楕円形プランで深さは0.4m、底面に壁溝と小柱穴を伴う。住居と併存するとすれば、それに付属する穴蔵のような施設の可能性がある。中世は溝と井戸が検出された。溝は概ね東西方向に直線的に伸びており、区画溝と判断できる。出土した中世土師器や陶磁器の時期は14世紀代である。

河川調査区では弥生時代後期の竪穴住居と溝が検出されている。竪穴住居は調査区の南西端で全体の約半分を調査できた。1辺約4mの四角形プランで、主柱穴は4基と推定できる。比較的多くの弥生土器の他、管玉や大型の砥石が出土している。溝は竪穴住居と約8mの間隔を置いて北東側を走っている。さらに北東側では遺構・遺物とも希薄になっていることから、居住域を区画する溝の可能性はある。

以上の調査成果は、弥生時代と中世の複合遺跡であるという従来の所見と一致する。弥生時代は鞍部地形を挟んで南西側の安原川寄りに遺構が分布するが、野々市町教育委員会の調査区を含めて概観すると、住居の絶対数が少なくかつかなり間隔を持った配置をとることが明らかになった。こうした住居密度の低さは扇状地扇央部の集落に共通しており、御経塚遺跡群など扇端部の集落とはわずかな距離を隔てていても対照的といえる。背景には、地下水の自噴地を欠く扇央部では水田経営による農業生産力が決定的に小さく、集団を求心できなかったことが考えられる。中世についてはかなり広域に展開する村落の存在が想定される。今後、構造の解明や景観の復元が期待される。（安 英樹）



新幹線調査区 竪穴住居



新幹線調査区 土坑



新幹線調査区 中世の遺構配置

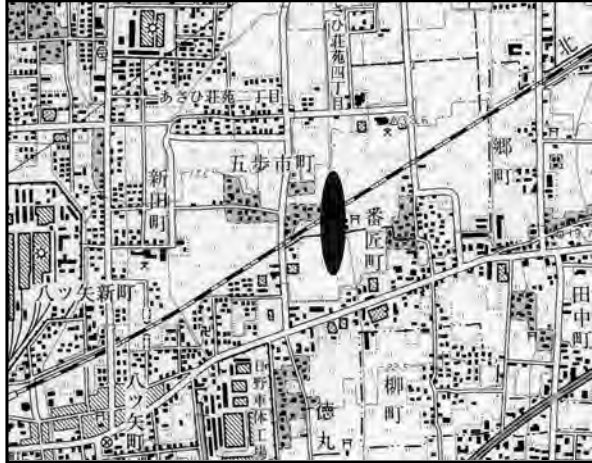


河川調査区 竪穴住居と溝

五歩市遺跡

所在地 白山市五歩市町地内
調査面積 12,510㎡

調査期間 平成19年4月25日～平成20年2月20日
調査担当 岡本恭一 白田義彦 林 大智 西田昌弘
森 由佳 中泉絵美子 伊藤雅文



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査成果の要点

- ・ 弥生時代後期後半から古墳時代前期及び中世の集落跡。
- ・ 竪穴建物28棟（重複含む）、布掘建物1棟、掘立柱建物8棟以上を検出。そのうち、竪穴建物の遺存状況が良好で、最大深約90cmをはかる。
- ・ 遺構の埋土には、地山質土が厚く堆積し、度重なる洪水禍によるものであろう。
- ・ 一部の建物で玉生産が行われ、そうでない竪穴との構造的な違いが認められた。
- ・ 竪穴建物（A区SI5）からガラス管玉が出土。県内初出土。

通称海側幹線といわれる国道改築一般国道305号を主体とする道路建設事業のうち、側道工事にかかる範囲について発掘調査をおこなった。側道がJR北陸本線を潜り抜ける設計となっていることから、線路を挟んだ両側については、道路幅全体の調査となった。また、調査区内に用水路や農道が縦横に入っていることから、それを保全しつつ稲刈り後の撤去によってようやく調査にかかれる状況であった。したがって、広い調査面積でありながら、小区画に分けた発掘を余儀なくされた。

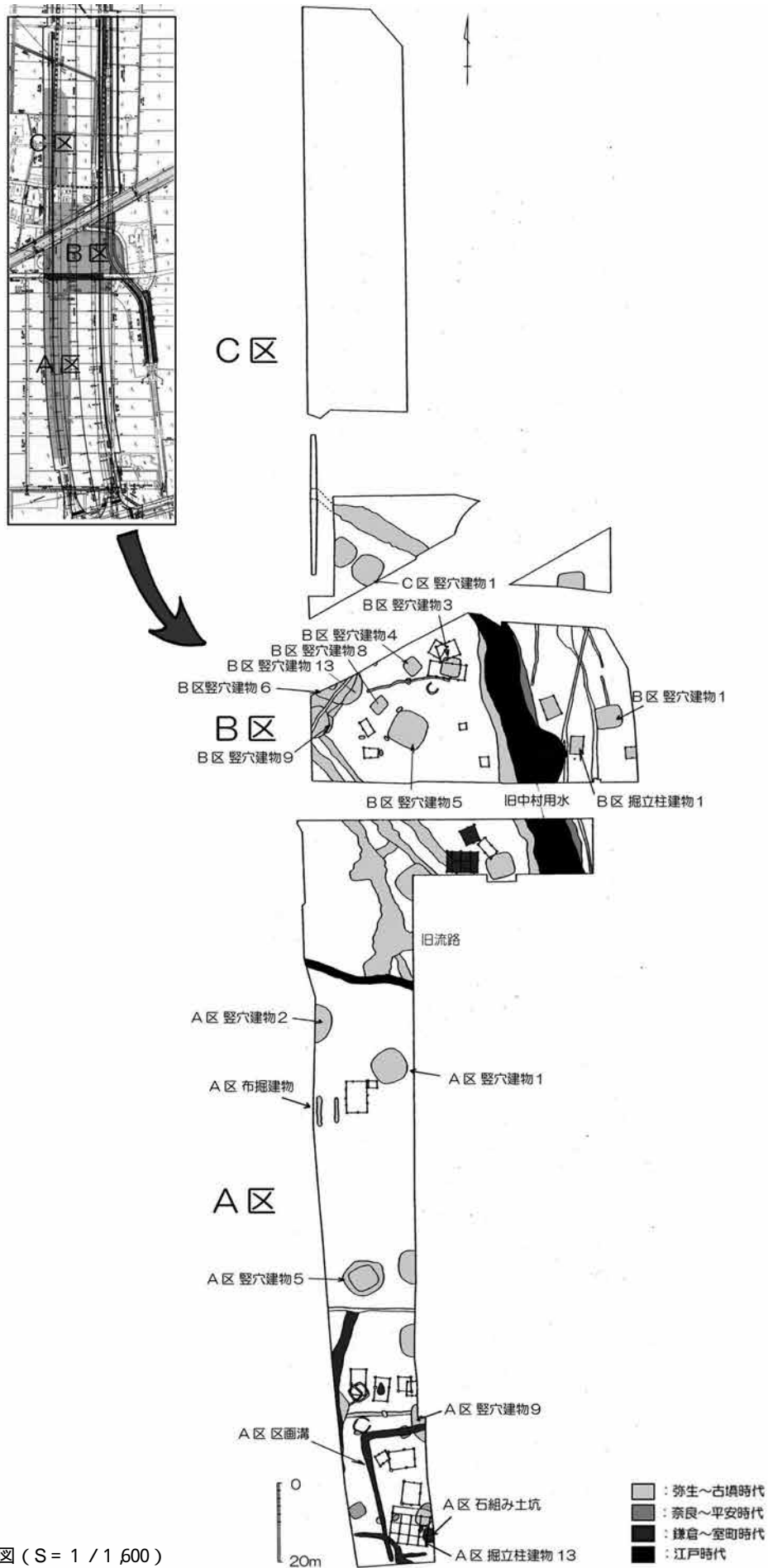
白山市道を境にして、その南をA地区、市道とJR線の間をB地区、JR線より北をC地区とした。さらに上述の小区画の調査区域ごとに番号をふって調査区名とした。（伊藤雅文）

A区

《弥生～古墳時代》

弥生時代後期から古墳時代前期を中心に、竪穴建物や布掘建物、掘立柱建物といった建物群のほか、土坑、旧流路、小穴等を確認した。これら遺構は、A区北部で検出された北西-南東方向に走る旧流路周辺と、やや空閑地を挟んで、A区南部の標高約19m前後を測る微高地上において密に確認することができ、集落内における空間配置を想定させる。

建物群の主体となる竪穴建物は、建て替えを含め、これまでに計13棟確認している。A区中央部で検出された竪穴建物5が、本年度調査区において最も大きく、その規模は長軸11.2m、短軸9.1mを測る。平面形態は不整楕円形を呈し、支柱穴は4本ないし6本で、中央には炭化物が若干混じる、やや深めの土坑をもつ。このほかの竪穴建物は、平面形態が隅丸方形を呈するものが多く、長軸で約4～8mを測る。いずれの竪穴建物も、検出面から床面までの深さが深く、竪穴建物1・2・9では約80cmを測るほか、50cmを超えるものが大半を占める。そのため、当時の構築方法や床面の状況



主要遺構図 (S = 1 / 1,600)

を良好な形で検出することでき、建物構造や埋没過程を知る上で貴重な成果が得られたといえる。出土遺物としては、甕や壺、高坏などが出土したほか、石製品としては碧玉質ないし緑色凝灰岩製の管玉の未製品や破損品、チップ、軽石製砥石、敲き石などが出土している。特に、後者の管玉製作関連の遺物は、数棟の竪穴建物に集中して出土する傾向がうかがわれた。こうした竪穴建物間にみられる出土遺物や床面構造、屋内施設の差異などから、主として「住まい」としての機能をもつ竪穴建物のほか、「生産の場」としての機能をもつ竪穴建物の存在もうかがわれ、竪穴建物における機能差を想定させる。

布掘建物は、A区中央部の1棟のみの確認ではあったが、長軸7～8m、短軸1m前後を測る2本1対の溝を確認した。いずれも柱根は残存していなかったものの、柱穴が各々3基確認でき、いずれも幼児拳大程度の礫が埋め込まれている様相が確認された。（西田昌弘）

《中世》

調査区南部を中心に、中世の遺構を確認した。北側に底を持つ東西4間×南北3間と推定される総柱の掘立柱建物13や、石組みのある土坑を検出している。この土坑は東側へ少なくとも一度作り替えられており、その際に、地盤が脆くなった西面と南面を石組みで補強したと考えられる。またこれらの遺構を囲むように、東西・南北にほぼ直角に曲がる区画溝も検出した。区画溝からは、珠洲焼や五輪塔の一部が出土した。他にも白磁・宋銭などが出土している。（森 由佳）



A区 竪穴建物1完掘状況



A区 布掘建物完掘状況



管玉未製品・破損品



A区 掘立柱建物13完掘状況



A区 石組み土坑検出状況



A区 区画溝完掘状況

B区

JR北陸本線と市道に挟まれた部分をB区と呼称し、用排水の保全や作業ヤードの確保などのため、さらに4小区(B1～4区)に区分して発掘調査を実施した。

B区では、弥生時代後期後半～古墳時代前期前半頃の集落跡を確認し、竪穴建物13棟、掘立柱建物8棟以上、大溝3条、土坑などの遺構を検出した。

竪穴建物は調査区全域で認められたが、西側へ向かうに従い分布密度が高くなり、調査区北西隅では7棟が重複して確認された。竪穴建物の平面形態には多角形や隅丸方・長方形を呈するものが存在し、規模により長軸7mを超える大型竪穴建物と、5m以下の小型竪穴建物に区分できる。多角形を呈するものは全て弥生時代後期後半～終末期頃の大型竪穴建物で、古墳時代前期初頭以降になると平面形態が隅丸方・長方形のものに統一される傾向が窺える。竪穴建物のなかには残りの良いものも多く存在し、竪穴建物5のように壁の深さが90cmを測り、一部に周堤の基部が残存するものや、竪穴建物1のように床面や屋内土坑に多数の土器が残されているものも認められた。その他、特筆される出土品としては、竪穴建物1から出土した太型蛤刃石斧、竪穴建物9から出土した鉄鎌、竪穴建物13から出土した勾玉があげられる。また、竪穴建物4の床面では多数の軽石が壺の中に納められた状態で確認された。なお、緑色凝灰岩製の玉作関連遺物は竪穴建物6と13から出土している。

掘立柱建物は柱配置が1×2間か1×3間で、床面積が10～20㎡を測るものが多く確認され、同時期の県内で確認された掘立柱建物と比べて通例の規模である。これらの掘立柱建物が小型竪穴建物とともに大型竪穴建物の周囲に設置されていることから、B区の集落跡では大型竪穴建物の周囲に複数の小型竪穴建物や掘立柱建物が伴う建物構成であった可能性が高い。

C区

JR北陸本線から北側部分をC区と呼称し、用排水や農道の保全などのため、さらに5小区(C1～5区)に区分して発掘調査を実施した。

C区では、調査区南側で弥生時代後期後半～終末期頃の集落跡、中央西寄りでは近世の集落跡を確認し、竪穴建物2棟、大溝1条、土坑などの遺構を検出した。

竪穴建物は大溝南側で2棟が近接して認められ、両者ともに平面形態は隅丸方形を呈し、規模は一辺7m程度を測る。また、建物の床面南側には屋内土坑が確認され、時期が降るに従って南壁寄りに設置される傾向が窺える。なお、竪穴建物1床面には多量の炭や焼土が確認された。(林 大智)



B区 竪穴建物1 完掘状況



B区 竪穴建物1 屋内土坑内土器出土状況



B区 竪穴建物3 完掘状況



B区 竪穴建物5 作業風景



B区 竪穴建物集中箇所 完掘状況



B区 掘立柱建物1 完掘状況



B区 西側 完掘状況



C区 竪穴建物1 完掘状況

ぶんぎょう
分校C遺跡

所在地 加賀市分校町地内

調査面積 1,010㎡

調査期間 平成19年8月20日～同年11月8日

調査担当 夷藤 明 谷内明央 松原秀浩



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

調査原因は一般国道8号改築(加賀拡幅)であり、本遺跡は分校カン山古墳群のある丘陵の北側裾部に立地し、現分校集落南端の国道8号沿いに位置する。

室町時代の墳墓、井戸、土坑、溝を検出し、土師皿、陶磁器、石製硯、石鉢、漆器椀、青銅製花瓶、火葬骨が出土した。

墳墓は木棺墓と火葬墓がある。木棺墓は周溝を持つ。平面が隅丸長方形を呈し、規模は3m×1.5mで深さ90cmを測る。坑底南端部で青銅製の花瓶が出土した。周溝は北・東側が断面逆台形状のしっかりとした掘り方を持つが、西・南側は断面皿状で浅い。墳墓の形式から在地有力者の存在が窺える。火葬墓は径40cm・深さ20cmを測るピット状の遺構で、埋土は炭化物や焼土を多く含む。上面で火葬骨が出土した。

井戸は平面が楕円形を呈し、規模は4.8m×3.4mで深さ2.5mを測る。検出面から1.5mほどで、井戸側が出土し、南側は抜き取られる。長さ2.5m前後の半截された丸太や板材で井桁状に組み立てられており、隅部は杭で固定されていた。底面で石製硯、裏込め土から漆器椀が出土した。

土坑は焼土坑と地下式坑がある。溝は方形に区画された溝や丘陵裾に沿う溝があり、内部からは陶磁器や石鉢などが出土した。(谷内明央)



周溝を持つ木棺墓(北から)



花瓶出土状況(南から)



井戸(東から)

平成19年度下半期の遺物整理作業

第1班

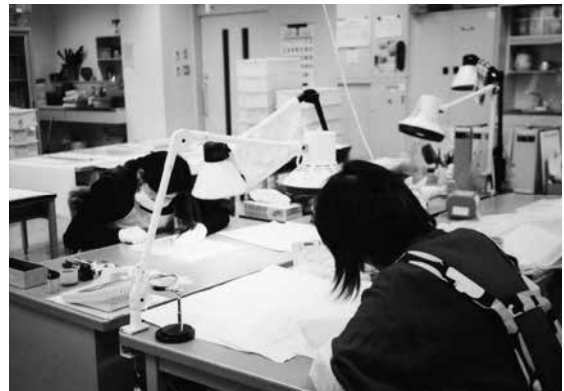
上半期に引き続き、白江梯川遺跡（小松市、平成14年度調査）の木製品を主体とする出土品の整理作業を行った。小さな斎串から大きな舟の部材、機織具や農具の部材、建築部材などと、色々な種類の木製品を実測した。なかでも、加工の工具痕が表裏にびっしりと残っていた琴板の実測は、視力と根気のいる難しい作業でした。

木製品の整理では、木材を針葉樹と広葉樹を見分たり、年輪や木目などの観察も実測するにあたり大変重要である事を学びました。実測の最初は、とまどっていた二分の一の縮尺実測も回数を重ねることで、次第に慣れてゆきました。ただ、木製品を浸しているコンテナについては、水の腐敗を防ぐために水の交換を行う作業も必要であり、体力と気力を要する大変な交換作業が続くと思うと、気が遠くなるような日々もありましたが、新しい発見や経験を積むことも出来て、有意義な1年を終えることが出来ました。

（河村裕子）



木器の実測作業



トレース作業

第2班

7月から整理作業へ入った加茂遺跡（津幡町、平成15年度調査）の分類を10月上旬に終え、実測・トレースを3月末まで実施した。遺跡は範囲も広く、現場で取り上げられた出土品には、縄文時代から中世までの遺物が確認された。

土器では弥生時代中期から後期の壺や甕が多く、口縁内面の羽状文や竹管による刺突文、胴部の何段にもなった短沈線など特徴的な文様を手がかりとして接合を進めた。土器の表面は摩耗、剥落はしているが、壺の肩に波状文が巡る完形品も出土している。須恵器では、古墳時代の坏や蓋の製品が多い。また、大型品の甕には、完形に近い状態までに復元できるものもあった。

石器では、石鏃や剥片が多く含まれていた。石包丁については4点を実測し、ほぼ完形品の石包丁は、長さ24cm位のものであった。なお、木製品ではアングンの織り機なども見受けられた。

（小林直子）



土器の接合作業



木製品の実測作業

第3班

上半期に記名・分類・接合の作業を実施した金沢城跡（金沢市、平成16年度調査）の実測・トレース作業を進め、野々江本江寺遺跡（珠洲市、平成18年度調査）の実測・トレース作業を行った。その後は、大槻ブンゾ遺跡他6遺跡（中能登町、平成17・18年度調査）の記名・分類・接合から、実測・トレースまでの作業と遺構図トレースを実施した。

大槻ブンゾ遺跡他6遺跡は、2年度にまたがっている7遺跡の発掘調査に関する整理事業で、その事業内容が、農林事業分と文化庁補助事業分に二分されていたことから、作業の写真撮影も含めて、整理の内容が複雑な整理作業となった。出土遺物は、弥生時代から中世にわたる幅広い時代の資料が含まれ、古代の墨書土器も多く出土していた。また、建物の柱根、中世の井戸枠などの大型木器の実測もあり、大変にバラエティに富んだ整理作業を経験した事業であった。（小林多恵子）



土器の分類・接合作業



木製品の実測作業

第4班

下半期においては、乾遺跡（白山市、平成2・3年度調査）、白江梯川遺跡（小松市、平成17・18年度調査）の整理作業を行った。

乾遺跡は縄文時代晩期と江戸時代前期の複合遺跡であるが、今年度の整理作業（実測・トレース）では、下層の縄文時代晩期から弥生時代初頭の遺物整理を中心に行った。そのなかでも、弥生時代初頭の柴山出村式や遠賀川式の土器資料は、注目すべきものであろう。また、当遺跡には配石遺構や集石遺構が多くみられ、石器類も多数出土している。とくに打製石斧の数は多く、実測した遺物のなか



土器の接合作業

でも群を抜いていた。

また、白江梯川遺跡は弥生時代中期から古墳時代後期、平安時代中期から近世にかけての複合遺跡であるが、平成17・18年度調査分に関しては、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての遺物が多く、それらの記名・分類・接合、実測・トレース作業を主に行った。土器には接合可能なものが多く、復元、またはそれに近い状態にまで、接合できるものが多くあった。ほかに、木製品の舟形、翡翠の勾玉、銅鏃、銅銭等の実測・トレース作業もあり、作業内容の濃い遺跡であったと思う。（横山そのみ）

第5班

上半期から継続した金沢城跡の玉泉院丸跡、河北門跡（金沢市、平成16～18年度調査）の記名・分類・接合および実測・トレース作業を主に実施した。途中には、白江梯川遺跡（小松市、平成16年度調査）の記名・分類・接合や実測・トレース、遺構図トレースを短期間実施したが、これは遺物量などが少ない作業であった。

金沢城跡の整理では、335箱のほとんどが近世の瓦類で、1箱でもかなりの重量となり、その上げ下ろしも大変だった。瓦には燻瓦や赤瓦に加えて、石瓦、鉛瓦などがあり、特に燻瓦の中には、今までにその形を見たことが無い曲瓦、棟瓦、伏間瓦などの瓦があり、金沢城の屋根の上で、どの様な位置に葺かれていたものか判らないことが沢山あった。



瓦の記名・分類・接合作業

私自身、近世瓦を実測した経験があまり無く、実測の時には遺物の表裏、上下、傾きなど、実測の基本的な事項において戸惑うこともしばしばあった。また、拓本の作業も多く、瓦当の凹凸面で用紙が破れたり、細部の形状まで採拓出来なかつたりして、同僚とやり直しを幾度も経験しながら進めた。

金沢城跡の瓦は、大変な整理作業ではあったが、作業の終盤には、目も身体もすっかり瓦に慣れていった。（北野清美）

第6班

下半期は大川遺跡（小松市、平成15年度調査）の実測・トレース作業を行った。土器は土師器の小皿や近世陶磁器の茶碗、木器は井戸枠の縦板、結桶の側板を中心に実測作業を進めた。また次は、徳丸ジョウジャグ遺跡（白山市、平成18年度調査）の整理に入った。特徴的なのは、弥生時代後期の竪穴遺構から玉造りに関する石製品が多数出土している事である。管玉の未成品実測にくわえて、細片・碎片の数量を最後に数えた時には、当遺跡における玉造りの盛況ぶりを実感した。

碧玉質の石材、緑色凝灰岩や鉄石英で作られた管玉は、いずれも未成品ばかり。荒割に始まって、研磨途中のものまで毎日極小の石との奮闘が続いた。中には小さすぎて、「白魚(?)」のような指先



出土木器の実測作業

ではどうにも巧くいかず、ピンセットまで使ってセッティングした。実際に長い時間、細かい剥離面を覗みつつ実測作業をしていると、夕方近くには、眼の奥がジーンとしてくる。こうして年度末まで、全員必死になって「管玉予備軍」に挑み続けたのであった。
(新谷由子)

第7班

下半期の整理作業は、上半期から続いた国分遺跡・国分B遺跡（七尾市、平成16年度調査）の作業を進めた。出土品には、土器・木器・石器・金属と様々な遺物がみられ、土器は製塩土器や土製カマド、大型の甕などが出土していた。また木器は、底板や槌、塔婆などがあり、塔婆には小さな穴が2カ所見られ、下部分には少し焦げた跡が残っていた。石器は、打製石斧や敲石、鉄石英の原石と思われる赤い石が出土されていた。

次に期間の短い三日市A遺跡の出土品整理作業を行い、最後に三木A遺跡（加賀市）の出土品整理作業を行った。三木A遺跡は、1986年度と1994年度の発掘分があり、両年度とも縄文土器や弥生土器、製塩土器が出土されており、製塩土器は平底の遺物が86年度で目立った。94年度では、耳環（銅）や寛永通宝も出土しており、整理中に赤い土で作られ、タマキ貝による調整が施された中国地方の壺が発見された。貝は普通、外側に貝の波があるのに対し、タマキ貝は内側に貝の波があると言うとても珍しい貝で、この出土品はみんなの注目を集める遺物となった。
(中尾望穂)



卒塔婆の実測作業



大甕の実測作業

復元・洗浄班

下半期の土器復元は、国分遺跡に始まり加茂遺跡、大槻ブンゾ遺跡などの4遺跡の復元作業を実施した。国分遺跡・国分B遺跡（七尾市、平成16年度調査）では、古墳時代の川跡から出土した土師器の浅鉢、甕、高杯の復元を行い、加茂遺跡（津幡町、平成15年度調査）では、古墳時代から古代の甕や壺、小型の鉢や取手付きなど、土師器の中型から小型の復元作業となった。このため今期の作業

では、特に難度の高い土器も無く、器高が30cm未満の小型の土器が多く、無事に作業を進めることができ、ホット胸をなで下ろしている。

なお、洗浄の担当では、平成19年度に発掘調査を実施した畝田・寺中遺跡や加茂遺跡などから出土した土器類の作業を実施した。土器などの小型品の洗浄作業は、洗浄室の椅子に座って洗えるが、大型の遺物や長い木器類は、室外で中腰の姿勢で洗うことが多く、腰に痛みを感じる機会がある。でも洗浄は色々な整理作業の中でも、一番に出土遺物を見ることができるところでもある。

(前田すみ子)



土器の復元作業



室内での洗浄作業

古墳確立期土器の広域編年

・・・東日本を対象とした検討(その1)・・・

田嶋 明人

はじめに

2005年、富山大学人文学部主催の「シンポジウム 北陸の古墳編年の再検討」(富山大学2007)に参加の機会を得た。課せられたテーマは、漆町編年を介して、北陸での古墳編年と土器編年との対応関係と課題について報告することであった。日頃より、北陸さらには東日本でのいわゆる定型化した古墳の年代がやや古く位置づけられているのではないかとの思いがあった。そして、古墳編年(広瀬1991)1期・2期の古墳と3期の古墳には、その数や、列島での分布域に大きな偏りがあり、その間に質的な違いがあるのではとも考えていた。それは、3期の古墳の成立が、土器編年での漆町9群の「画期」と連動しているのではないかとの想定による素朴な思いでもあった。さらに、定型化した古墳の年代に関して、漆町編年での画期をまったく古墳編年2期から3期の築造との編年事例があまりに多くみられることも、くだんの疑問を大きくした。このことから、漆町9群の「画期」を踏まえた古墳編年について報告してみようと、勇んで依頼を受けた。が、その根幹をなすべきの東日本での土器編年が整理できていなかったため、思いのみを述べるに留まり、不調に終わった(田嶋2007a)。

東日本での土器研究にとって、1993年に日本考古学協会により新潟で開催された「シンポジウム 東日本における古墳出現過程の再検討」は画期をなす企画であった(日本考古学協会1993)。そこでは、東日本各地域での土器編年が示され、共通の時間軸による併行関係が模索された。事務局の努力により東日本域での併行関係も提示された(甘粕・春日1994)。その後も新たな資料を踏まえ、東日本地域での編年的研究は大いに進展し、より緻密な時間軸が用意されたことは確かと考えるが、はたして併行関係の検討やそれぞれの地域での土器群推移、言い換えれば土器様式の理解と評価で、新潟で開催された「シンポジウム」の段階から特段に進んだと言えるのであろうか。

そのようにいう筆者も、漆町編年と他地域との併行関係については、先学の成果を借用することはあっても、各地域の土器編年に直接学び検討したことはほとんどなかった。改めて述べるまでもないが、併行関係を確定し、それぞれの地域の土器様式がもつ共通点と相違点を明らかにすることが、該期、ひいては古墳確立期の地域の動きを理解する基礎と考える。

本稿は、富山大学人文学部主催のシンポジウムでの宿題を果たすための基礎的な作業でもある。漆町9群の「画期」のみを課題とするものではないが、以上の経緯を踏まえ、東日本域での各地の編年成果に学び、筆者なりの併行関係の整理を目的とする。

今回、畿内との併行関係を検討した(その1)をようやく成稿できたことを思えば、長丁場となる。しかし何とか行き着きたい。ご教示と、気の永いおつきあいをいただければ幸いである。

I 漆町編年の整理

1 併行関係の検討にあたって

漆町編年では、土器群がもつ特徴とその推移の方向性を重視した。土器動態でくくれる小単位を

「群」とし、共通するより大きな単位、「群」をいくつか包含するような単位を「段階」とした。土器動態は「段階」をいくつか包含したより大きな単位で括ることも当然できる。そして「段階」と「段階」の間を「画期」とした。「画期」も「段階」と同様により大きな「画期」を設定することもできる。一方、「群」については時間軸で細分できるし、当然、土器動態でもさらに細分できる。

土器編年での区分（様式区分）は、土器群変遷の理解・評価のための作業仮説的なものとも考えているが、区分の仕方では違った土器群推移がみえてくるし、みえるはずの土器群推移がみえづらくなったりもする。甚だしい場合は存在しない土器群の推移をつくりだす可能性さえあると考えている。区分にこだわる由縁である。土器編年、中でも区分（土器様式）の捉え方は、歴史認識や描きたい歴史像を反映しているのだらうから、統一を強いるものでもない。一方、本稿で対象とする古墳確立期は、古墳という墓制をそれぞれの地域が採用していく時期に当たっている。その段階での土器群の推移が、個々に特徴をもつとしても、現象面で大きな違いをみせていても、共通項をもたないはずはないとも考えている。それは、畿内と連動した動きをみせる北陸南西部での土器群と一見大きな違いをみせる東日本域での土器群との対比でもいえよう。

併行関係の検討では、直接的には漆町編年での「群」で対比することとなるが、「段階」と「画期」での他地域編年との比較が重要な視点と考えている。その点で、本稿では、漆町編年での「段階」にみる様式的特徴の比較と、「画期」区分が成立するのか否か、成立しないとすればどの「画期」で、どの地域で等々で成立しないのかの見極めに重点を置き検討を進めたいと考えている。

2 漆町編年の整理

漆町編年から久しい。この間、資料も増加し、いろいろなご意見もいただいた。今回、他地域との併行関係の検討を進めることとしたが、他地域編年と漆町編年とを対照する中で、当然のことではあるが、漆町編年の課題や未整理部分もみえてきた。このことの詳細に触れる余裕はないし、その検討は他地域との併行関係検討後の方が良いとも考えている。ここでは本稿を進める上での最小限の整理と必要な修正・補正を行っておきたい。

1) 「群」の整理

漆町編年では1群から15群まで設定した。その後、中でも漆町8群から漆町11群については再検討の作業をしていない。補正の必要性を認めているが、ここでは、白江式の評価と係わる漆町6群の下限と漆町7群の上限の関連についての現状での整理と、今回、漆町12群の画期を漆町11群に変更したので、漆町11群組成を新出資料によりながら検討し、あわせて布留式新段階（森岡・西村2006）との併行関係、中でも畿内での須恵器出現時期との併行関係に見通しを得るため、漆町11群から漆町12群にかけての時間軸について、整理しておくこととしたい。

漆町6群と漆町7群

漆町6群と漆町7群は、組成で大きく異なる。きわめて乱暴であるが単純化すれば漆町6群は月影甕をはじめとした在来形式からなり、漆町7群は布留祖形甕⁽¹⁾、V様式系叩き甕等の畿内（近畿）系の新出形式からなる。加賀では両組成の確実な供件事例を確認していない。しかし継起する様式であり接触ないし重複期間は予想されたが、明確な回答を用意できないままだった（田嶋2006）。そして、このことは、布留0式の議論（寺澤1987、堀2002・2006）とも絡み、漆町編年の整理すべき課題の一つ⁽²⁾となっている。順序は逆になるが、以下での畿内編年との併行関係の検討結果を援用しつつ、この

課題について整理をしておく。

月影甕、⁽³⁾月影系甕と布留祖形甕あるいは連動した動きをみせる⁽⁴⁾V様式系叩き甕との接触期間を示す事例には、鯖江市・長泉寺土坑群での(福井埋文1994)月影系甕と布留祖形甕の供伴(図1 - 13~17)、天理市・柳本遺跡群四ノ坪地点土坑7上層での(青木2000)月影甕と布留祖形甕の供伴(図2)、近江町・黒田SX01での(近江町1994)月影甕と布留祖形甕の供伴(図1 - 18・19)、福井市・今市SD5での(福井市1996)定量のV様式系叩き甕と月影甕の供伴がある(図1 - 20~25)。

は北陸南西部での布留祖形甕と月影系甕との通常みられる供伴状況を示す事例であるが、その推移を一遺跡で、しかも土坑資料から窺える好例として提示した。推移はSK046・SK056・SK061(Ⅰ

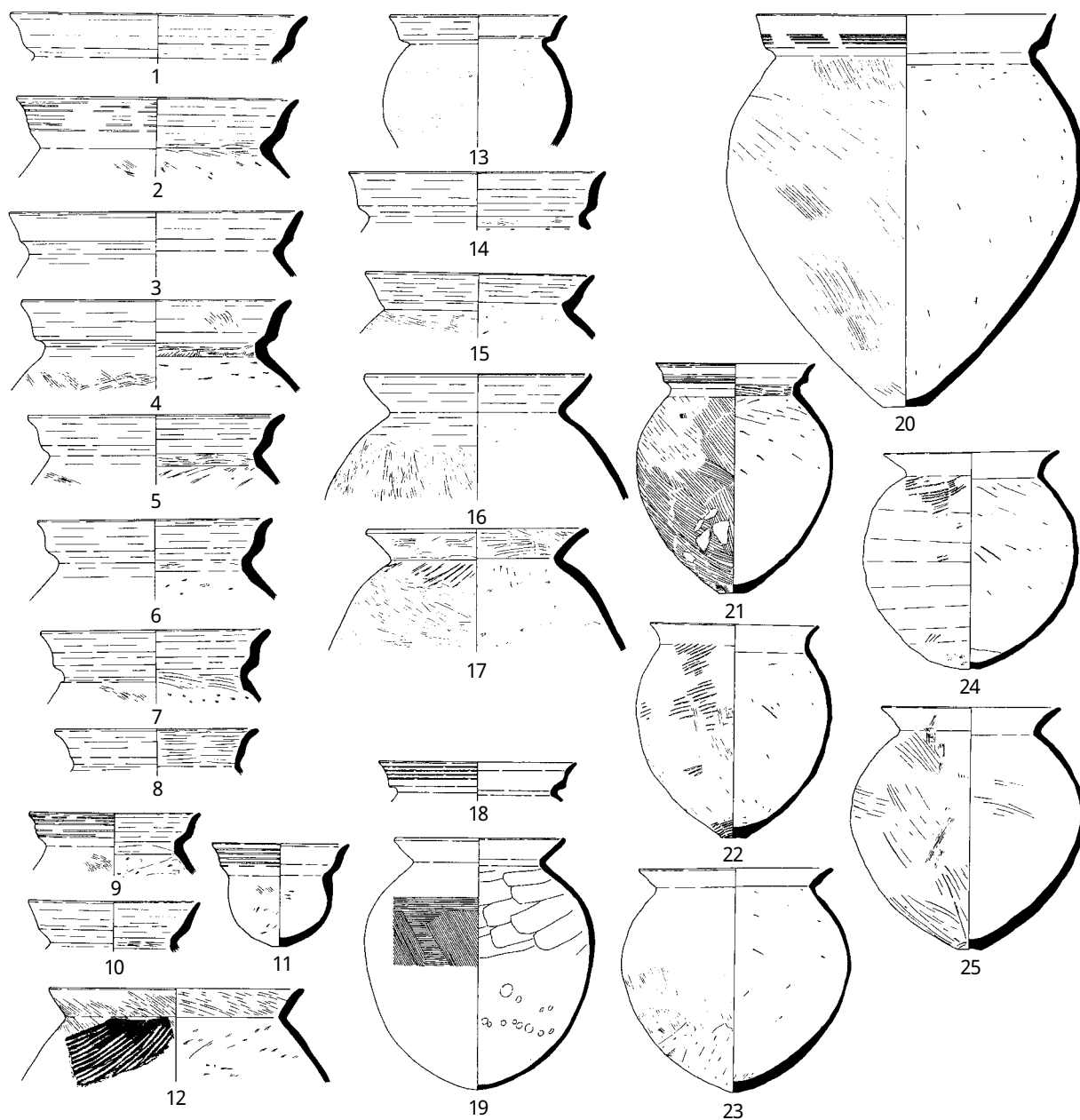


図1 月影甕・月影系甕と布留祖形甕・V様式系叩き甕(S=1/6)
 1~12:長泉寺SK046 13~17:長泉寺SK058
 18・19:黒田SX01 20~25:今市SD5

期) SK018・SK058(Ⅱ期) SK020(Ⅲ期)として整理されている(青木1994)。SK046・SK056・SK061の段階は月影甕からなる段階で、確実な布留祖形甕は供伴していない。月影甕の型式を資料の多いSK046で見れば、漆町7群に下る可能性があっても、漆町6群の古い段階にはのぼらないとできる(図1-1~11)。次のSK018・SK058段階ではSK058に布留祖形甕が供伴する。月影甕の内、図1-13は先の段階とした型式に類似するが、図1-15は明らかに月影系甕とできる。また図1-14でも、該地は遅くとも漆町6群併行期には月影式土器圏から離脱していた可能性があり、月影甕の型式分類については、別に用意する必要があるが、月影系甕としたい型式である。長泉寺でも月影系甕の段階で布留祖形甕が伴うとできる。

・ は、月影甕と布留祖形甕等との併存を示す希少な事例である。月影甕の型式は、漆町6群新相であっても新しい段階の型式で(図1-18、図2) ・ の型式は概ね一致する。 は、畿内との「1併行関係の検討」の項で検討しているとおり、この型式の月影甕が布留式古段階古相(森岡・西村2006)八尾市・中田1丁目土坑2(米田1986)の段階と接点をもつ。 は での供伴状況を傍証する資料としてあげた。 では定量のV様式系叩き甕と月影甕との供伴がみられる。月影甕は と同一の型式とできる(図1-21)。V様式系叩き甕は、長泉寺でも定量とはできないが、SK046、SK058で見られる。

一方、漆町7群は、加賀市・永町ガマノマガリ25土坑(石川埋文1987) 小松市・白江ネンブツドウ7号溝上層 金沢市・押野西E2区L4土坑(金沢市教委1987)の推移で理解している(田嶋2006)。押野西E2区L4土坑は布留甕を伴うことから布留式古段階新相、八尾市・萱振SE3(大阪府教委1983)の段階を遡らない。白江ネンブツドウ7号溝上層は、月影系甕を含み、屈折鉢等の供伴からも布留式古段階古相が上限となる。その点で、漆町7群でもっとも古く位置づけている永町ガマノマガリ25土坑が、布留式古段階古相と接触するくだんの月影甕と時間軸で併行する可能性が高い。当該資料がさらに遡上しないとできるまでの根拠はないが、白江ネンブツドウ7号溝上層に先行しても後出することはないと推定している

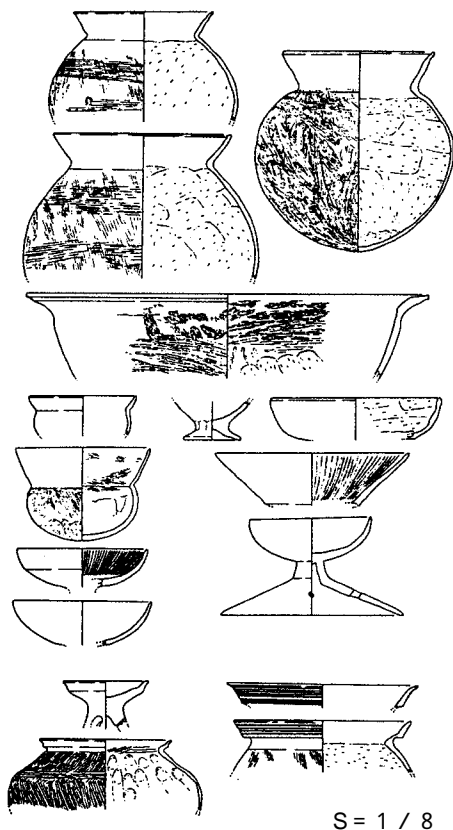
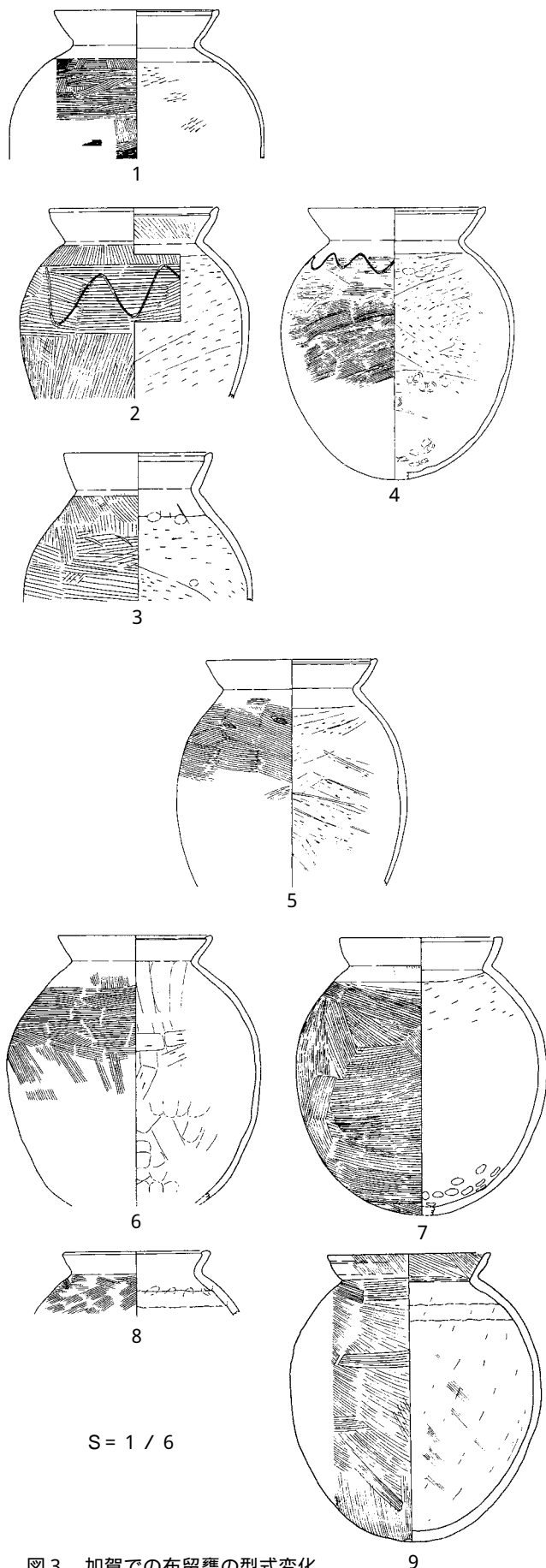


図2 柳本遺跡群四ノ坪地点土坑7上層
(青木2000 一部)

金沢市・二口六丁小溝(金沢市教委1983)の段階でも、月影系甕が供伴していることや、長泉寺でみた「月影」系甕と布留祖形甕の供伴状況から、1段階古いとできる ・ での月影甕型式と併行とするのが、現状での妥当な予測とできよう。また、永町ガマノマガリ25土坑および同遺跡では定量のV様式系叩き甕がみられ、V様式系叩き甕と布留祖形甕が一体として波及してきたことを窺わせている。そのことから、今市SD5で、くだんの月影甕型式と定量のV様式系叩き甕が供伴しているのも、傍証となろう。

漆町編年で示したように、G3類、H2類等(形式分類の出典を示さない表記は、漆町編年(田嶋1986)による、以下同様)の布留祖形甕関連形式は、漆町5群からみられるが希である。漆町7群に布留祖形甕(I類)が、突然ともいえる状況で出現・盛行する。今後、先行する布留祖形甕群が新たに発見されたとしても、漆町7群で定量的に波及するとの趨勢は変わらないであろう。永町ガマノマガリ



S = 1 / 6

図3 加賀での布留甕の型式変化

25土坑を漆町7群の古い段階、押野西E2区L4土坑をその新しい段階、白江ネンブツドウ7号溝上層を中間段階として再確認しておく。そして、永町ガマノマガリ25土坑段階の布留祖形甕がくだんの月影甕型式と供伴すると現状で整理しておく。

漆町11群・漆町12群の検討

漆町11群は、金屋サンバンワリ324土坑 金屋サンバンワリ300土坑の推移で整理した。漆町12群は、金屋サンバンワリ132土坑を標式としたが、良好な一括資料に乏しく、時期幅のある金屋サンバンワリ1号大溝等の資料を援用しつつ設定した。

漆町11群の特徴を以下での検討の趣旨に即して要約すれば、小型精製三種はほぼ崩壊。甕組成は布留甕で占められるが、器肉が厚くなり、八ヶ調整の規範を弛緩したものとなる。高杯は布留系形式で占められる。F類等の粗製小型壺については、事例が希少であったため漆町11群組成の中では大きく扱えないと判断した。そして、漆町12群は、布留甕の規範が一層弛緩するとともに、布留甕と交代する「くの字」甕が定量出現し、高杯も杯部外面に稜ないし突帯をもつ新出形式が加わり、F類等の粗製小型壺が盛行するとした。

その後、北加賀地域であるが、金沢市・沖町遺跡で新たな資料が検出された（金沢市教委1992）。この資料を踏まえて該期について整理しておく。

布留甕の型式分類 まずもって時間軸の整理をする。該期の時間軸は、定量出土する布留甕の型式変化によるのが有効と考える。図3は、該期前後の布留甕の主に八ヶ調整からみた型式変化を模式的に示したものである。

型式Ⅳ（図3 - 1）は、器肉が薄く作られ、布留甕独特のハケ調整の規範を保ったもので、漆町10群で主体をなす（漆町編年4類）。刷毛調整のパターンで、肩部ヨコハケが頸部まで及ばず、頸部に先行するタテハケがみられる1類（図3 - 1）と肩部から頸部までヨコハケ調整を施し、頸部タテハケを消す2類との、少なくとも2タイプがみられる。

型式Ⅴ（図3 - 2・3・4）は、ハケ調整の規範は維持しているが、器肉が厚くなり、口縁部の肥厚も大きくなったもので、漆町11群の指標としている型式である（漆町編年5類）。ハケ調整で1類と2類がみられ、型式Ⅳ1の系譜にある型式Ⅴ1は、ハケ原体が粗くなる特徴をもつ。型式Ⅴ1は、肩部ヨコ刷毛が比較的連続的に施された型式Ⅴ1 - a（図3 - 2）と、ヨコハケの単位が短くなり、乱れがみられる型式Ⅴ1 - b（図3 - 3）に細分できる。型式Ⅴ1 - aは漆町11群古相とした金屋サンバンワリ324土坑資料で、型式Ⅴ1 - bは新相とした金屋サンバンワリ300土坑資料で主体をなす型式である。

型式Ⅵ（図3 - 5）は、プロポーションは概ね型式Ⅳ・Ⅴの形状を保っているが、ハケ調整の規範をほとんど喪失したものである。肩部ヨコハケが斜行となったり、幅の狭いヨコハケが名残のように肩部を廻る調整となる。漆町編年時には、少なくとも定量的には確認できていなかった型式である。以下で検討する沖町遺跡で定量みられ、漆町11群には出現していた型式とできる。ハケ調整の弛緩から形式的には型式Ⅴに後出するとでき、出現時期の詳細は特定できていないが、漆町11群の新しい段階には出現していたと想定したい。また、図3 - 5に示した沖町資料より崩れた型式がみられることから漆町12群の前半期頃までは継続した型式と考えている。

型式Ⅶ（図3 - 6・7）は、ハケ調整の規範を喪失すると共にプロポーションにおいても、口縁部の矮小化、胴部の球形化等々変質した型式。漆町12群の標式としているが、図3 - 7は漆町12群でも新しい型式とみている（漆町編年6類）。

型式Ⅷは、布留甕の最終型式と理解しているもので、型式Ⅶの様相を一層進めたもの（図3 - 8）と、布留甕とできるかどうかとも検討する必要のあるもの（図3 - 9）等の型式が見られる。時期は、一部は漆町12群に含まれようが、漆町13群に中心のある型式と理解している。

漆町11群組成の検討 沖町遺跡は、溝で略方形に区画された内部に掘立柱建物が伴う豪族居館かと想定されている遺跡で、布留甕は型式Ⅳ以前から確実な事例でも型式Ⅵまでみられ時期幅がある。この内、区画溝であるSD03は、多少の先行型式を含むが漆町11群併行期の土器群とできる。特徴を整理すれば次のようになる。図4～6には、SD03資料の一部、d地区資料を示した。

布留甕は型式Ⅴ・Ⅵからなる。

甕組成では、布留甕と「くの字」甕からなり、構成比は「くの字」甕が多い。

高杯は布留系形式からなり、漆町12群にみられる明確な新出形式を含まない。

F類等からなる粗製小型壺が定量的にみられる。

小型器台は形式的に退化したものの1点がみられるが（図5 - 41）組成からは欠落している。

以上の内、 の布留甕型式Ⅴと は、当該資料の上限が漆町11群であることを示し、 は漆町12群にくだらないことを示すが、 の布留甕型式Ⅵ、 、 は、主として南加賀の資料で設定した漆町11群と様相で異なる。

では、先にも触れたように、型式Ⅴは漆町11群の標式であるが、型式Ⅵは型式として確定できる程度の事例を確認していなかった。沖町SD03では、型式Ⅴ - a、型式Ⅴ - bと定量の型式Ⅵからなり、型式Ⅳ、型式Ⅶとできる資料はみられない。しかも型式Ⅴと型式Ⅵには大型破片、完形品が目立ち、両型式が併存していたことは確実とできる。型式Ⅵは、当該溝の布留甕の中では新出型式とできよう

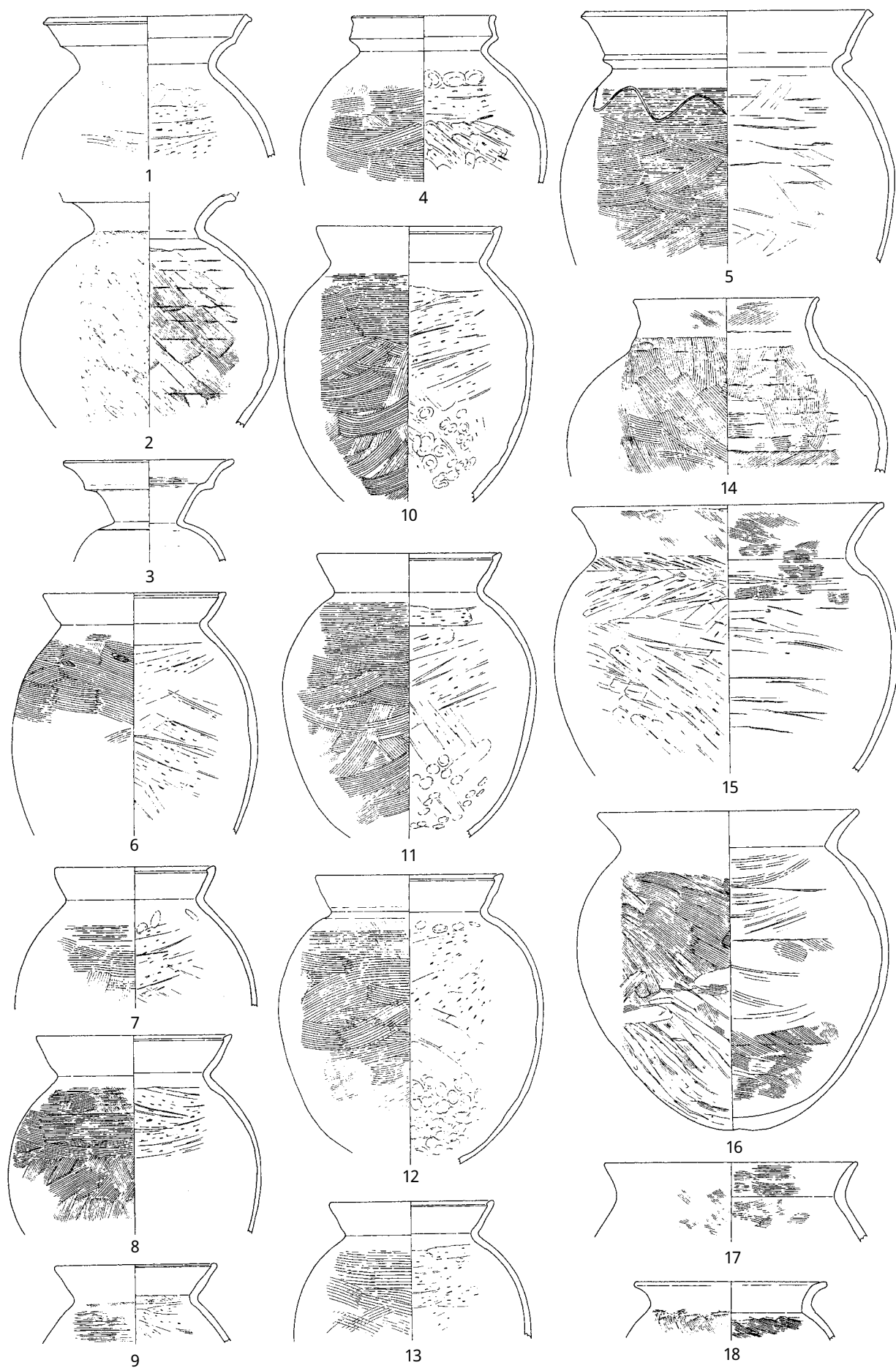


图4 冲町 SD03 d 地区出土土器 (S = 1 / 5)

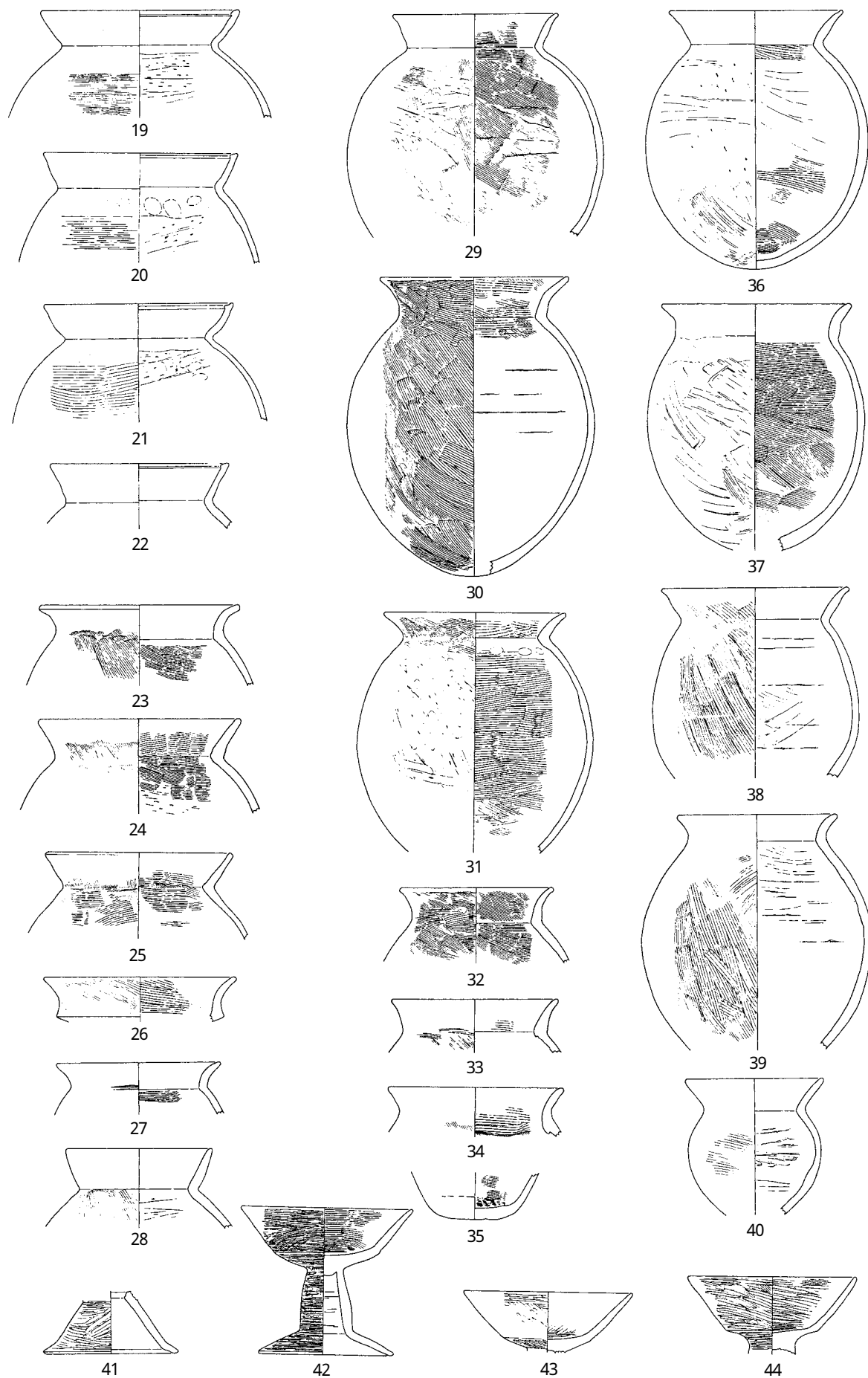


图5 冲町 SD03 d地区出土土器 (S=1 / 5)

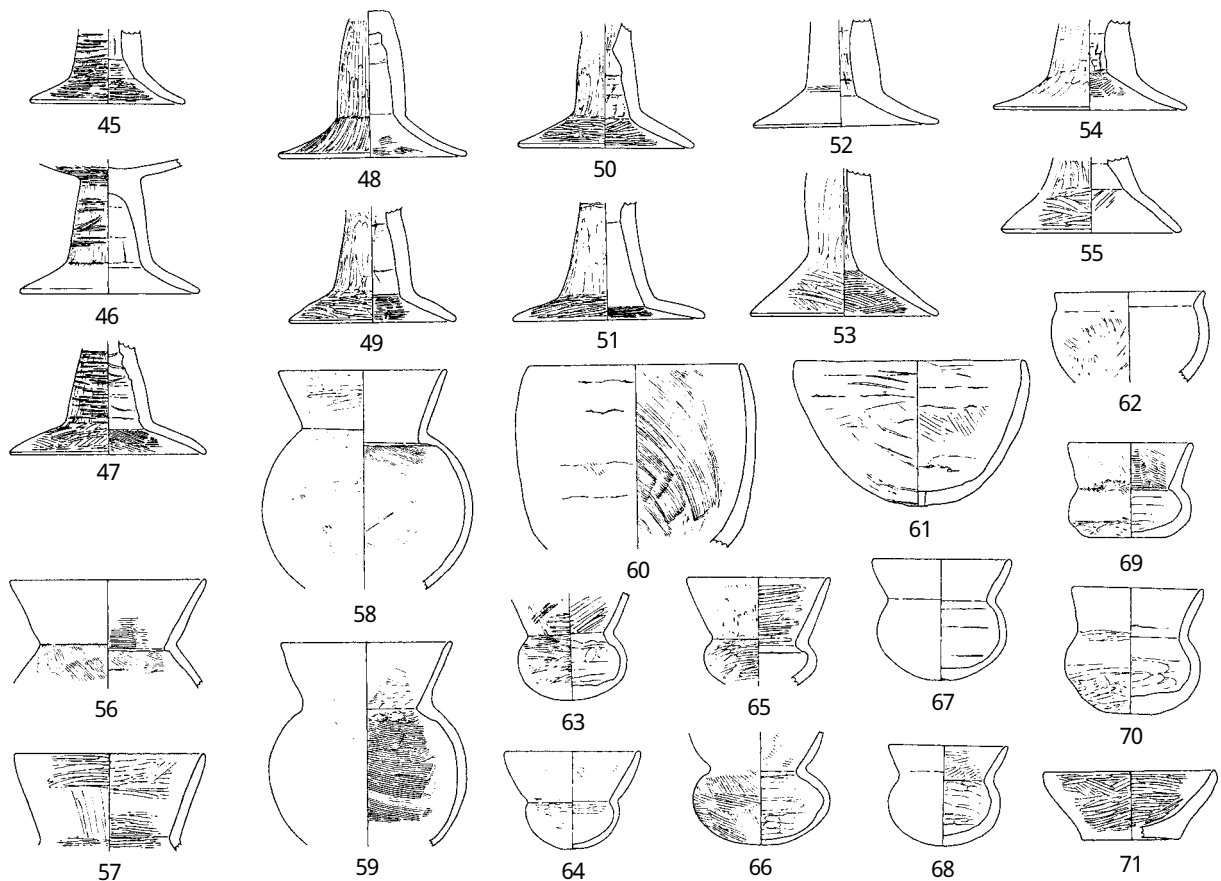


図6 沖町 SD03 d 地区出土土器 (S = 1 / 5)

が、漆町11群には出現していたとできる。漆町11群を構成する布留甕型式に加えておく。

は、漆町11群では、時期を特定できる事例が1点しか確認できず、漆町11群で出現するとしていたが、盛行は漆町12群としていた。沖町遺跡と漆町遺跡での頻度の違いは、単なる遺構間での組成差の可能性もあるが、遺跡差を反映している可能性が高いとみている。漆町11群段階には、普遍性はともかくとして、定量的に出現していたと訂正しておく。

の甕組成は漆町11群と大きく異なる。漆町11群は原則布留甕からなるとしていた。沖町遺跡の報告書作成のための検討会が開催された折は、このことの評価ができず、当該資料の帰属を保留した経緯がある。SD03の資料群から「くの字」甕、布留甕・型式Ⅵを新しい要素として抽出し、漆町11群から漆町12群にかけての資料とみることもできようが、その理解では、先行するSD07でも定量的「くの字」甕がみられることの説明ができない。また、多量の高杯が出土しているが、漆町12群には定量的に確認できる新出形式がみられないことの説明もできない。漆町11群併行期の北加賀地域では甕組成に定量的「くの字」甕が加わっていたとするのが妥当な理解と考える。

包含層資料であるが漆町12群併行期に中心をもつと推定している金沢市・田中B遺跡では(金沢市教委1984)、布留甕の頻度が極端に低く、ほぼ全てが「くの字」甕で占められている。南加賀の該期の布留甕の頻度とはあきらかに異なる。漆町12群併行期の北加賀、中でもその北部では布留甕の頻度が極端に低下していたのは確かである。北加賀では、漆町10群併行期の甕組成比を検証できるまでの資料はない。その点で、沖町SD03での定量供伴については、漆町11群併行期の動きと特定できず保留部分を残すが、漆町11群併行期の北加賀では、布留甕からなる土器圏に「くの字」甕が参入し、

該期に布留系土器圏の分解の兆しがみられたと、とらえることもできる。このことは、今回、画期区分を漆町12群成立時から漆町11群成立時に変更したこととの妥当性とも係わることである。

沖町遺跡のSD03資料から、漆町11群には、F類等粗製小型壺が定量的にみられるとし、布留甕では型式Ⅵが出現していたとしたい。また、該期の加賀地域内での甕組成は布留甕で占められると理解していたが、北加賀の少なくとも北部域では、甕組成で際だった違いがあったとしたい。

2) 「段階」・「画期」の整理

漆町編年では、漆町2群から15群の間を六つの「段階」に区分した。その後、表1で示したように数次にわたり区分を変更してきた。変更の理由・根拠等はそれぞれの報告を参照いただくこととし、ここでは、他地域では画期とされることが希な漆町9群の画期について、多分に漆町編年での理解(田嶋1986)の繰り返しとなるが整理する。併せて本稿で画期を変更した漆町11群の画期について、その理解するところを示しておきたい。

表1 漆町編年の訂正・補正の経緯

本稿編年	法仏式と月影式(2007b)	白江式再考(2006)	永町ガマノマガリ(1987)	漆町編年(1986)	
1群	V-1 V-2 V-3	1群	1群	1群	
2-1群	2-1群	2群	2群	2群	法仏式
2-2群	2-2群				
3-1群	3-1群	3A群	(+)	(+)	月影式
3-2群	3-2群	3B群	3群	3群	
4群	4群	4・5群(古)	4群	4群	白江式
5群	5群	4・5群(新)	5群	5群	
6群	6群	6群	6群	6群	
7群	7群	7群	7群	7群	古府クルビ式
8群	8群	8群	8群	8群	
9群	9群	9群	9群	9群	高島式
10群	10群	10群	10群	10群	
11群	11群	11群	11群	11群	
12群	12群	12群	12群	12群	
13群	13群	13群	13群	13群	
14群	14群	14群	14群	14群	
15群	15群	15群	15群	15群	

漆町9群の画期

漆町編年では、漆町7群から漆町8群を、外来系土器の主体が畿内・近畿系土器に比重を移していく段階。漆町9群は、それまでみられた畿内・近畿系以外の外来系土器が払拭されていく段階とし、漆町9群の成立を画期とした。畿内での該期直近の画期の理解は、漆町8群併行期=布留式中段階古相(森岡・西村2006)、ないしはそれより古い漆町7群新相=布留式古段階新相(布留Ⅰ式、萱振SE3段階)の成立に求めるのが大方の理解である。東日本域でも管見の範囲であるが、漆町9群併行期に画期を求める理解は希である。漆町9群の画期は、はたして他の地域でも存在・適用できるのか。

漆町8群併行期には、細別型式はともかくとしても布留式の組成・形式が揃うとできる。このことをもって布留様式の確立とし、漆町8群併行期頃を画期とするのが大方の理解である。対して漆町編年では、漆町8群での小型三点セット等の定型化・定量化を、「白江式」以来の「多様な土器祭式が収束・斉一化された結果」であり、「新しくはじまる形式の端緒とし

て、あるいは「布留式」が持ち続ける固有の顕著なメルクマール」とみるのは疑問とし、それは、「当期以降、小型三点セットの組成が急速に崩れ、形骸化していくことで容易に理解」できるとした(田嶋1986)。今日的にはより厳密な型式的整理を必要としようが、漆町8群併行期での小型三点セット等の定型化した組成を、「はじまり」としてではなく、庄内期からの土器祭式の「帰結」と評価したのである。これが漆町8群併行期の布留様式の理解である。

「はじまり」か、「帰結」かは、全てで相反する議論とは理解していないし、漆町8群併行期で布留系形式が揃うことを過小に評価するものではない。このことは、漆町9群併行期に、布留様式の組成、形式がどのように変化するのかを明らかにして検証すべきことであろう。中でも畿内の布留様式が該期で大きく変化することはないのか、畿内との併行関係の項で検討することとしたい。

もう一つの視点は、漆町8群併行期までは、布留系土器の地域への波及が点的であるのに対し、漆町9群併行期からの波及は面的で、東日本では東北南部に及ぶ動きとの予測にある。しかも、漆町9群併行期からの波及は、地域形式を払拭するまでの波及で、漆町8群併行期の波及とは質的に異なっていたのではないかと想定にある。漆町10群併行期には程度の違いがあっても地域形式が払拭されるとの理解は周知のこととできる。その起点が漆町8群併行期、さらに遡れば漆町7群併行期ないしそれ以前にもみられることも否定しないが、実質的な展開を漆町9群併行期に見出したいと考えている。

漆町11群の画期

漆町11群と漆町12群の間に設けていた画期を、漆町10群と漆町11群の間に変更する。漆町11群は、古墳編年での5期のはじまりと併行しよう（広瀬1991）。この画期は、機能の転換を伴うBタイプの土器食器の変革期、土器食器様式からは律令型土器様式の端緒となる画期に当たる。漆町2群以降に設定した画期とは質的に異なる特徴をもった画期と評価している（田嶋1995）。

漆町編年時は、漆町11群では新出形式が顕在せず、新出形式が明瞭な形で出現する漆町12群の成立に画期を求めた。そのことから、漆町11群を、小型精製三種の欠落、布留甕等の布留型規範を弛緩した粗雑化等の変化から、「停滞した土器群」、「衰退する土器群」としか評価できなかった。今回、漆町11群に画期を求めたことで、これら変化を、漆町10群からの流れではなく、漆町12群以降に続く新たな動きとして評価する方向で考えている。小型精製三種等の欠落等々を「組成の衰退」としてではなく、布留式組成からの「脱却」、「放棄」として捉え直したい。

しかし、該期の土器群には、この評価を積極的に裏付けるような新たな変化・動きがさほどみえないのも実情である。現状でも漆町12群での変化の方が大きいようにさえ見える。先の沖町遺跡の検討では、F類等の粗製小型壺の定量的出現を該期のこととした。変化の一つに加えたい。また、布留甕領域に「くの字」甕が参入する動きを、該期でのことと想定してみた。きわめて大きな変化としたいが保留部分を残しており確証を得るには至っていない。他地域の土器群との併行関係とその動きを検討する中で、模索していきたい。

どの画期についてもいえるが、画期を一つに限定し、そのことにこだわるつもりはない。それは、該期での画期でみれば、漆町11群併行期、漆町12群併行期、漆町13群併行期に、それぞれ特徴的な変化がみられ、それぞれが中期土器様式に向けての階段とできるからである。ただ、ここでの画期の設定は、漆町11群以降のみでなく、先行する漆町10群以前の土器群の評価とも係わり、同時に、畿内・布留式、尾張・松河戸様式（赤塚1994）、関東・和泉式等々と直接的に係わってくる大きな課題である。議論が必要である。

II 畿内との併行関係

1 併行関係の検討（表2）

本稿で対象とする時期幅を網羅し、近畿地方はもとより西日本各地の編年との対応関係も検討して

表2 近畿地方土器編年の併行関係と細分案(森岡・西村2006)

本書(統括)の区分案	時代区分	弥生時代						古墳時代								
		後期後半			末			初頭								
	様式区分		畿内第五様式						庄内式(併行)							
		古段階			中段階			新段階				布留式				
		古相		新相		様相Ⅲ		様相Ⅳ		様相Ⅴ						
各論の併行関係	大和							様相Ⅰ 前半	様相Ⅱ 後半	様相Ⅲ 前半	様相Ⅳ 後半	様相Ⅴ 前半				
	河内	13期	14期	15期	16期	17期	18期	19期	20期	21期	22期	23期	24期	25期		
	山城	山城Ⅲ期		山城Ⅳ期		山城Ⅴ期		山城Ⅵ期			山城Ⅶ期		山城Ⅷ期			
	和泉	下田Ⅰ-2式		下田Ⅰ-3式		下田Ⅰ-4式		下田Ⅱ-1式			下田Ⅱ-2式 古相 新相		下田Ⅱ-3式			
	紀伊							庄内式併行期							布留式期	
	摂津	西摂1様式		西摂2様式		西摂3様式		西摂4様式			西摂5様式		西摂6様式		西摂7様式	
既存の細分案	関川1976							纏向1式 前半 後半		纏向2式 前半 後半		纏向3式 前半 後半		纏向4式		
	寺沢1980 1986・2002	様式4		様式5		庄内0式			庄内1式		庄内2式 庄内3式		布留0式 古相 新相			
	米田1991							庄内式期Ⅰ		庄内式期Ⅱ		庄内式期Ⅲ		庄内式期Ⅳ		
既存の標識資料	田熊 6Y2溝	上六万寺式 唐古45号竪穴上層			北島池 下層式	中田刑部 土坑	中田 SX01	美園 DSD317	東郷5次 SD9	纏向辻土 壇4下層						

いる森岡秀人・西村 歩の総括(森岡・西村2006)と、その成果を踏まえた中河内での西村編年(西村2008)を軸に、併行関係の検討をすすめる。もとより、両氏の編年を十分に理解しているわけではないし、畿内においても異論もあろう。が、両氏の編年は、情報が多く、漆町編年との対応関係をとりやすい。

畿内と北陸との併行関係に関しては、北陸では、谷内尾晋司(谷内尾1983)、田嶋(田嶋1986b)、吉岡康暢(吉岡1991)、栃木英道(栃木1994)、堀大介(堀2002)、大野英子(大野2003)等の検討がある。北陸外では寺澤 薫(寺澤1987)、赤塚次郎(赤塚1990)、加納俊介(加納1991)、関川尚功(1994)、植田文男(植田1994)、米田敏幸(1997)、北島大輔(北島2000)、堀の編年(堀2006)を介しての森岡・西村の検討(2006)等がある。さらに市村慎太郎は、近畿出土の北陸系土器を集成し、あわせて併行関係を検討している(市村2003・2004a)。

以上のように、すでに多くの蓄積があるといえるが、先での、2003年に(財)大阪府文化財センターが主催したシンポジウムでの新たな成果、『古式土師器の年代学』等を踏まえ、ここに筆者の理解を提示しておきたい。

1) 庄内式と漆町4群から漆町6群

漆町4群 従来より、大和・布留豊井(打破り)地区井戸の月影壺(図7-1)が知られていた。供伴する畿内型式は纏向1式とされるが(小田木1992)、やや新しいとの理解もあるようである。いずれにせよ漆町4群とできる資料であろう。その後、八尾市・久宝寺05272土坑で(大阪府埋文2007)装飾器台(図7-2)、同・井戸531で(大阪府埋文2004)月影壺(図7-3)、等の良好な資料が確認された。装飾器台は搬入品かとされており全く違和感はない。漆町4群とされる金沢市・千田土器溜まり25に、口縁部、透し孔の形状で酷似した型式がみられる(金沢市埋文2002)。久宝寺05272土坑は庄内式古段階中頃とされる(西村2008)。月影壺(図7-3)は胴部の形状で類例の少ない型式とできるが、金沢市・額谷(石川埋文1998)、鯖江市・光源寺(福井県埋文1994)に類似した事例がみられ、北陸系として問題はない。漆町4群とできよう。当該井戸は庄内古段階新相とされる(西村2008)。付け加えておくが、厳密な判断はできないが、以上の事例、中でも装飾器台は漆町4群の型式としても古い型式とはできない、とみている。他に、畿内以外の事例ではあるが吉備・津寺溝16で(岡山県教委1996)漆町4群の月影壺と米田・庄内期Ⅰ式の庄内甕Aが供伴するとされる(米田

本圖(総括)の区分案	時代区分		古墳時代												
	初頭		前期											中期	
	様式区分		古段階				中段階				新段階				
各論の併行関係	大和	様相Ⅳ 後半	様相Ⅴ				様相Ⅵ								
	河内	24期	25期	26期	27期	28期	29期	30期	31期	32期	33期	34期			
	山城	山城Ⅶ期	山城Ⅷ期												
	和泉	下田Ⅱ-3式	布留1式 下田Ⅲ式				古段階		布留2式 新段階		布留3式		布留4式 古段階 新段階		
	紀伊	庄内式併行期 第4段階	布留式古段階												
	摂津	西摂6様式	西摂7様式												
	既存の細分案	安達・木下 1974		坂田寺跡下層 平城宮朝集殿下層溝				上ノ井手 SD031 藤原宮内裏東外郭 SD912・SD914		上ノ井手 SE030下層		上ノ井手 SE030下層			
阪田 1984			第1期				第2期		第3期		第4期				
寺沢 1986・2002		布留0式 古相 新相		布留1式				布留2式		布留3式		布留4式 古相 新相			
米田 1991		庄内式期Ⅳ		庄内式期Ⅴ = 布留式期Ⅰ				布留式期Ⅱ		布留式期Ⅲ		布留式期Ⅳ		布留式期Ⅴ	
既存の標識資料	纏向辻土坑4 下層	中田1- 39土坑2		萱振 SE03		朝集殿 下層溝	小若江北式				船橋 OI	大庭寺 TG232			

森岡・西村(2006)と西村(2008)との対応は表3(51ページ)に示した。

1997)。溝資料であるが、注目したい資料である。以上の供伴事例から、漆町4群が庄内式古段階と併行関係にあることは動かない。このことは赤塚(赤塚1990)、米田(米田1997)等も指摘している。

漆町5群 八尾市・成法寺SE2の月影甕(図7-4)がある(大阪府教委1986)。口縁部での擬凹線文はみられないが、加賀でも良くみる型式とできる。当該井戸は、米田の庄内式期Ⅱ(米田1991)にあたり、西村は古段階新相から中段階の古い時期としている(西村2008)。また、天理市・柳本遺跡群四ノ坪地点土坑1の高杯は、変容しているが北陸系としたい資料である(青木2000)。北陸系との理解で良いなら漆町5群とできよう。青木は庄内様相Ⅱ後半(青木2006)としており、森岡・西村は、該期を庄内古段階新相併行とする。他に、久御山町・佐山SH415、SH227で複数の月影甕が出土している(京都府2003)。SH415の月影甕(図7-5~8)は、叩き調整を伴うことから変容型式とできるが、口縁部の造作は月影甕の型式的特徴をよく留めており漆町5群とできる。この竪穴の供伴資料は佐山Ⅱ-2期で、庄内1~2式(寺澤1986)併行としている(高野2003)。

漆町5群については、成法寺SE2、佐山SH415等、森岡・西村の庄内式中段階(古相)を時

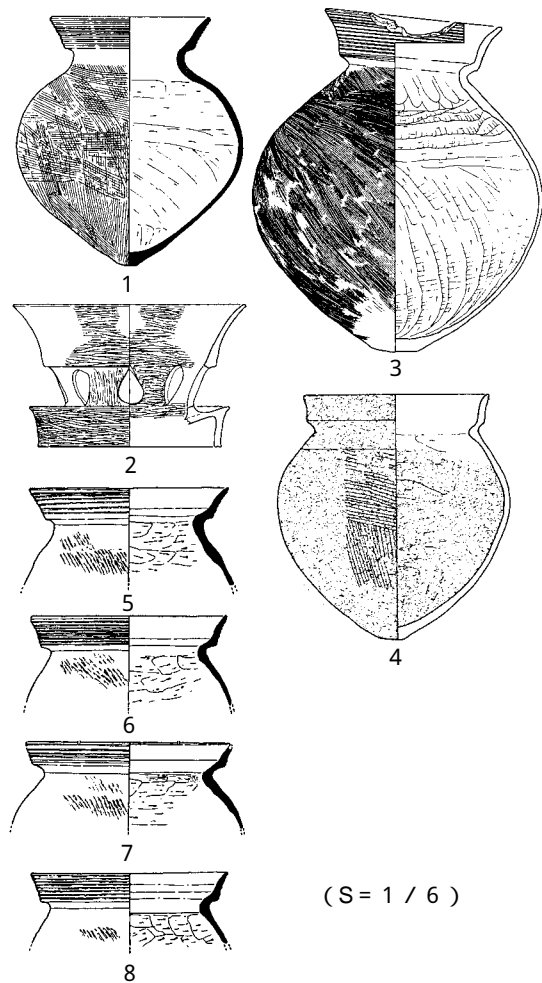


図7 畿内での月影形式
 1: 布留豊井(打破り)地区井戸
 2: 久宝寺05272土坑
 3: 久宝寺井戸531
 4: 成法寺SE2
 5~8: 佐山SH415

(S = 1 / 6)

期幅に含んでおり、漆町4群より後出の土器群と供伴する傾向が確実にみられるとできる。しかし、柳本遺跡群四ノ坪地点土坑1の高杯については、北陸系とできれば、漆町5群でも古い型式とはできないが、庄内古段階新相併行とされている。北陸系か否かも含め検討の余地を残す。わずかな事例であるが、以上の供伴事例に即せば、漆町5群の下限は庄内式中段階の中頃あたりとなる。

その場合、以下で触れるとおり漆町6群が、森岡・西村編年に即せば庄内式中段階の後半から、新段階のすべてをカバーすることとなり、わずかであっても間延びした印象を拭えない。このことと関連しようが、北島は、纏向2式の新しい段階、寺澤・庄内3式にあたる纏向東田南溝(南部)中層(筆者註 新しい一群)と纏向3式古段階の同・東田南溝(南部)上層でのS字甕は、共にB類中段階と供伴しており時期差はみられないとしている(北島2000)。そして、青木は前者を様相Ⅲの前半、後者を様相Ⅲ後半としているように思われる(青木2006)。確かに、森岡・西村は、寺澤・庄内3式と纏向3式の古段階を同時期とし庄内式中段階の後半に併行させていることや、庄内式中段階と新段階については、古段階のように古相、新相を設けていない。その後の西村の中河内の編年(西村2008)でも同様の扱いをしている。その点で間延び感はある程度解消できるともいえるが、纏向2式中段階の前半以前に置き、新段階では辻土坑4下層までの間に(+)段階を設けている。また、森岡・西村は、高橋編年「10a期は庄内式後半期全般にわたって間延びするのではなからうか」としている。この指摘も気に懸かる。高橋編年10a期の畿内での併行関係に言及できないし、東田南溝(南部)の資料についても溝資料であり、厳密な時間軸の検討はできないと思われるが、漆町編年と畿内編年との併行関係の検討の中での印象としてあえてとり上げた。検討課題としたい。

なお、纏向東田南溝(南部)中層(新しい段階)に供伴するS字甕B類中段階は、漆町6群と併行関係をもつと理解している。漆町5群が庄内式中段階の後半、青木様相Ⅲ後半には下らないとの傍証にはなる。S字甕等を介した尾張との併行関係については、次回、稿を改め触れる。

漆町5群については、一部庄内式古段階に遡上する可能性をもち、庄内式中段階の前半とは確実に併行関係をもつとしたい。

漆町6群 古相については良好な供伴事例を提示できないが、白江ネンブツドウ7号溝下層にみられる高杯E、小型鉢G1について、纏向3式に特徴的な器種との指摘がある(関川1994)。

新相の資料には、天理市・柳本遺跡群四ノ坪地点土坑7上層の月影甕がある。公表されている2点に加え(青木2000)、他に数点の月影甕がみられる⁽⁶⁾。月影甕は漆町6群でも最新の型式で、このことは先に触れた。供伴資料は、様相Ⅴ前半(青木2006)で、森岡・西村は布留式古段階前半に併行とする。漆町では、溝資料であり供伴に保留部分を残すが、四ノ坪地点土坑7上層と同型式の月影甕がみられる白江ネンブツドウ26号溝で、ミガキ調整を施した小型丸底壺G2が出土している(図8)。この形式は布留式古段階前半から出現するとされており(森岡・西村2006)、該期を遡らないとすれば、漆町6群の最新段階が布留式古段階前半と接触していることとなる。先での四ノ坪地点土坑7上層でのあり方と整合する。漆町6群は、下限で布留式古段階前半と接触し、多くを庄内式新段階と併行するとできよう。上限については、北陸系形式からは明らかにできないが、先に触れたとおりS字甕を介するならば、庄内式中段階後半までは遡上する可能性をもつとできよう。



(S = 1 / 6)

図8 白江ネンブツドウ26号溝

追加事項 森岡・西村は、堀編年(堀2006)を介して加賀・越前での小型器台の出現時期を、「小型器台165の出現は、編者らの庄内式期設定のメルクマールであるが、北陸ではかなり遅れることが分かる(筆者註 長泉寺・白江Ⅰ式 = 庄内式中段階後半)。形態的には大和様相Ⅱ後半との影響関係

がうかがえようが・・中略・・廻間Ⅱ式のインパクトの中で理解すべきであろう」とした(森岡・2006西村)。しかし、漆町5群、庄内式中段階前半には確実にみられ、金沢市・南新保D P11-1(金沢市教委1986)同・畝田SK331(石川埋文1991)事例等にもるように、漆町4群、庄内式古段階にはすでに出現していた可能性が高い。少なくとも畿内での出現に大きく遅れることはない。

また、庄内式古段階のはじまりを長泉寺・月影Ⅰ式と併行するとした。堀編年での長泉寺・月影Ⅰ式は、漆町2-2群の型式さえ含んでおり、本稿での結果とも大きく異なる。この理解は、従来の庄内式と月影式の併行関係の理解を踏襲したようにも思われる⁽⁷⁾。本稿は、森岡・西村の編年を軸に進めているので、ここに付言しておく。

2) 布留式古段階と漆町7群

漆町7群以降は北陸系の形式が衰退することから、布留系形式、山陰(吉備)系形式等の共有形式で併行関係の検討を進める。加えて、各段階にみる様式的特徴とその推移も加味する。

漆町7群は、いわゆる布留祖形甕が一定度の型的範型をもち定量的にみられるようになる段階から、布留甕が出現するまでをあて、布留祖形甕からなる段階と布留甕が加わる段階とに細分できる可能性を指摘した(田嶋1986)。森岡・西村も確実に布留甕が出現する河内・萱振SE3段階までを布留式古段階とする。

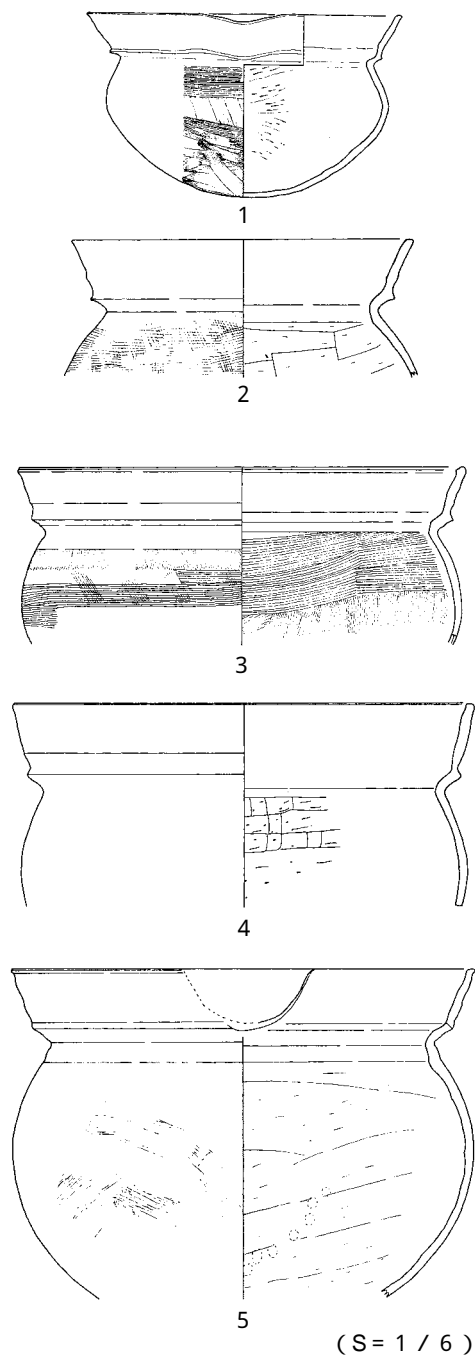
漆町7群の布留祖形甕を纏向・辻土坑4下層の型式と中田一丁目土坑2の型式とで比較するなら、後者に似る。米田も中田一丁目土坑2の布留祖形甕との類似を指摘している(米田1997)。また、西村は、鉢A・Bの型式変化に着目し編年表を作成しているが(西村2008)、該期での時間軸はもとより、北陸南西部との併行関係を考える上でも、山陰(吉備)系甕・鉢、中でも鉢Bでの比較は有効と考える。比較例として、図9に八尾市・小阪合SD1の鉢(八尾市文化財1988)同・久宝寺南K3号墓周溝内下層(大阪府1999)の甕をあげた(図9-1・2)。北陸南西部では大型鉢は希で、いきおい甕との比較となるが、口縁部の変化は共通しているとみなせ、その型式から漆町編年での甕形土器B1aの2類と対比できる。漆町7群併行の型式として齟齬はないとみている。西村は、両者ともに布留式古段階併行とし(西村2008)、杉本は後者を河内26期(杉本2006)とする。

漆町7群の細分は未了であるが、古い様相は主たる時期幅を中田1丁目土坑2頃、西村の布留式古段階古相と併行。布留甕が出現する漆町7群の新しい様相は、萱振SE3段階、西村の布留式古段階新相に併行すると理解している。このことは、漆町6群の理解とも係わる。以下で「項」を改め再度、触れる。

3) 布留式中段階と漆町8群~漆町10群

西村編年の布留式中段階古相が漆町8群、中相が漆町9群、新相が漆町10群に併行すると理解している。該期は、布留甕が畿内と連動した型式変化を示すことから、併行関係で大きな齟齬をきたすことはない。ここでは、漆町9群と布留式中段階中相との併行関係を検討しておく。

河内の布留甕は、中段階中相には口縁部は拡張されて内傾する典型的なものに落ち着いてくる(西村2008)とする。漆町9群での布留甕3類が主体となり型的に安定する動きと共通する。くだんの山陰(吉備)系鉢・甕は、漆町8群までは先行型式を踏襲した型式変化を辿るが、漆町9群には通常の複合口縁の型式から、第二口縁部下端で屈曲する甕形土器B1aの3類に大きく型式変化する。比較例として図9に八尾市・船橋440方形周溝墓(大阪府文化財2005)同・久宝寺北SD4029(大阪文化財1987)同・中田SK201(八尾文化財1995)を示した。前2者は型的にやや先行する可能性



(S = 1 / 6)

図9 山陰(吉備)系甕・鉢

- 1 : 小阪合 SD01
- 2 : 久宝寺南 K3 号墓周溝内下層
- 3 : 船橋440方形周溝墓
- 4 : 久宝寺北 SD4029
- 5 : 中田 SK201

の編年上の位置に関しては、畿内の研究者間で一致をみていない。ちなみに、森岡・西村は新段階の次に設けた「中期」の当初に置き、西村・池峰も同様に河内・布留4式古段階としているが、杉本は、須恵器生産の開始が河内32期に遡る可能性を示唆し、大庭寺 TG232号窯式を河内34期としているようである(杉本2003)。辻は2段階(新)、米田も布留式期Ⅳとしているようで、西村・池峰よりは少なくとも一段階遡らせる。そして、後で触れるが藤田憲司はさらに古く理解しているようにも思われ

をもつが、特に久宝寺北 SD4029は(図9 - 4)、口縁部の形状で甕形土器 B 1 a の3類の特徴をみてとれる。また、中田 SK201は(図9 - 5)、西村が編年表に用いている資料であり、加賀では類似の事例は知らないが、第二口縁部下端の該期での変化の一類型とみておきたい。西村は、上記事例の内、船橋440方形周溝墓は一部古相とまたがり、久宝寺北 SD4029は一部新相とまたがりとしているが、中心は中相にしている(西村2008)。

また、河内での庄内甕をはじめとした庄内系形式の減少などの組成の変化も、従前の多地域の形式を組成から払拭する漆町9群期での動きと共通するとできよう。この特徴については、以下でも触れる。

漆町9群の下限については、小型精製器種での鉢で、小型化のすすんだ型式がみられる等から、布留式中段階新相に下降する可能性をもつ。漆町9群は山陰系中型甕、くの字甕、いわゆる東日本型の高杯等々が残存する段階とし、それらが欠落する漆町10群と区別した。畿内での中相と新相の指標とは異なっている可能性があるが、漆町9群の下限の位置づけは、布留系形式に斉一化される時期、斉一化の遅速に係わる。小型精製器種等の比較作業を今後とも進めることとし、ここでは漆町9群の主たる併行時期幅は布留式中段階中相にあるとしておく。

4) 布留式新段階と漆町11群、漆町12群

畿内、中でも河内、和泉との対応関係を検討する。漆町11群、漆町12群は、森岡・西村の布留式新段階と中期の一部(森岡・西村2006)、西村・池峰の和泉・布留2式新段階から布留4式古段階(西村・池峰2006)、米田の布留式期ⅢからⅤの一部(米田1991)、『古式土師器の年代学』から離れるが辻美紀の1段階と2段階(辻1999・2002)と併行すると整理している。森岡・西村の該期での併行関係は良く整合性を図っていると理解しているが、堺市・大庭寺 TG232号窯式

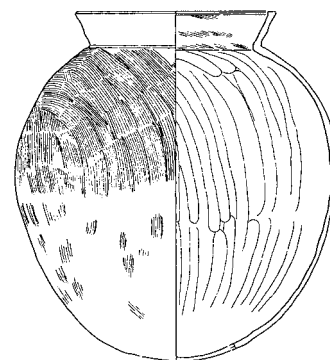
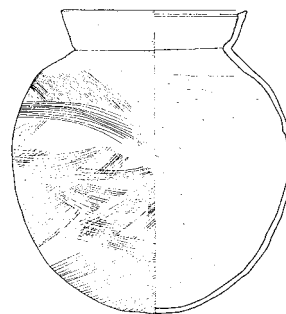
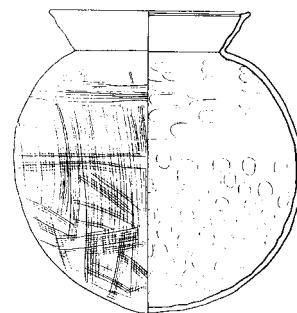
る。

布留式新段階の古相は（この表記はないが古い段階の仮称とする。新相も同様。）布留甕の器肉が厚くなり調整が粗くなることや、小型器台、小型丸底壺、有段鉢の欠落等々から、漆町11群と併行することは動かないであろう。ただ、新段階の当初とする河内31期では小型器種が残るようであり、加賀との地域差であるのか、漆町11群が若干後出するのか、検討の余地をのこす。また、西村・池峰は、新出形式である和泉編年での高杯Eを布留Ⅱ式新段階に出現するとしているが（西村・池峰2006）加賀では、現状で漆町12群を遡らない。

併行関係での課題は、新段階新相以降と漆町12群との併行関係、および最古級とされる大庭寺TG232号窯式の位置づけにある。筆者の理解を分かりやすく示すため、河内・和泉での布留甕による時間軸を図10で示した。は加賀での型式Ⅵ、は型式Ⅶ。は型式Ⅶに含められるが、よりは後出の型式として分離した。分類は先での加賀での基準によった。この分類での標式資料を例示するならば、は八尾市・八尾南SE22（八尾南調査会1981）大庭寺TG232号窯灰原下層（59層直上面）（大阪府1996）大阪市・長原SK701（大阪市2003）。は八尾南SE26・SE21、長原SX701（大阪市2001）。は、大庭寺谷部1（393-OL）第Ⅶ層下層（大阪府1996）が該当する。

大庭寺谷部1（393-OL）での供伴須恵器は、「最古型式」とTK73型式からなり、「最古型式」は大庭寺TG232号窯式とやや形態変化の進んだものからなるとする（大阪府埋文1996）。同・第Ⅶ層下層出土の布留甕（図11-1）は、として例示したもので、漆町12群でも新相を遡るものではない。当該資料の時間軸について、西村・池峰が同期とする布留4式古段階の堺市・四ツ池SD2・SD4（堺市教委1991）等を見ると、も含むようであるが、よりも後出の段階に中心をもつとみて齟齬はないように思われる。本例をもって大庭寺TG232号窯段階とするのは難しいと考えている。

杉本が河内34期とする長原SX701は、大庭寺TG232号窯式の須恵器を伴う。筆者は大庭寺TG232号窯式の下限を示す資料ととらえる。若干の幅をもつとされるが、布留甕にはがみられ（図11-2）大庭寺谷部1（393-OL）第Ⅶ層下層よりは確実に古いとできる。そしてこの資料の併行関係について松本百合子は、田中清美のⅠ期前半（田中1996）より古く、八尾南SE26併行とする（松本2001）。辻美紀は、長原SX701、田中清美のⅠ期前半を辻編年2段階（新）とし、八尾南の事例ではSE21を標式とし、大庭寺TG232号窯式段階とする（辻1999・2002）。八尾南SE26と八尾南SE21ではSE26がやや古い様相をもつとみているが、型式ではともにに含まれる。八尾南の井戸資料では、八尾南SE22 八尾南SE26間の違いが大きいと理解している。ちなみに辻は八尾南SE22を2段階（古）に置いている。時間軸で微妙な違いがあるとはできるが、該期を大庭寺TG232号窯式段階とする論者は多い。漆町編年との併行関係では、布留甕の型式から漆町12群併行とできる。



(S = 1 / 6)

図10 布留甕の型式変化
1 : 八尾南 SE22
2 : 八尾南 SE26
3 : 大庭寺谷部 1 (393-OL)

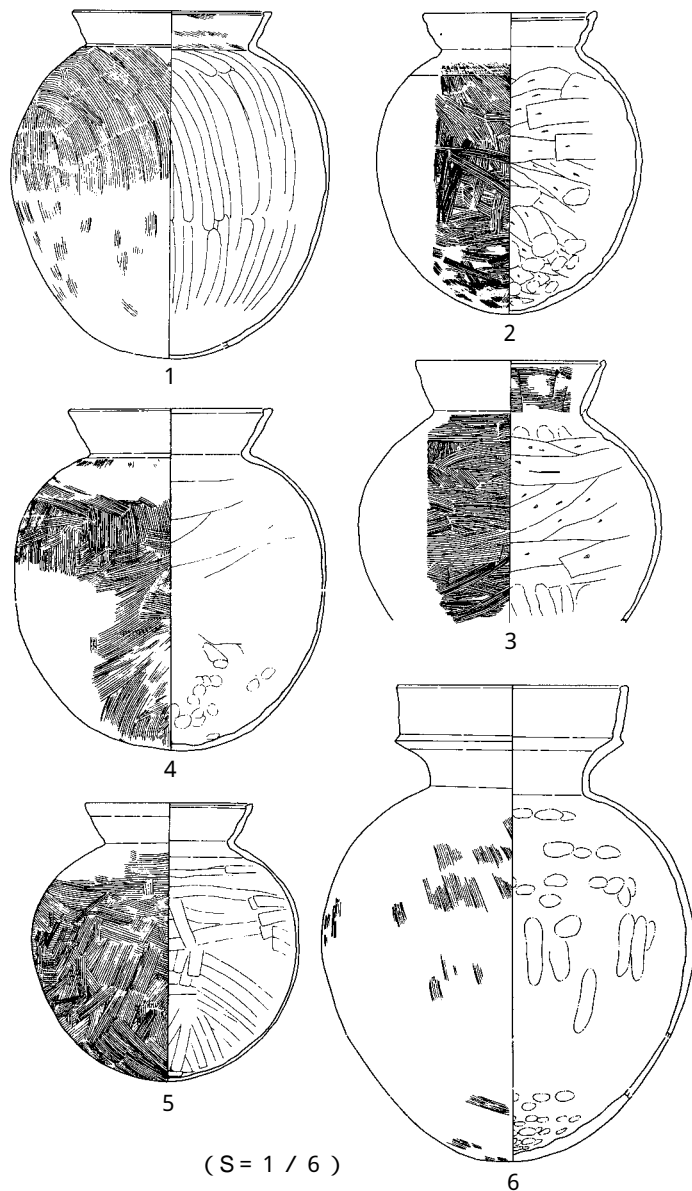


図11 大庭寺等の布留甕
 1 : 大庭寺谷部 1 (393 - OL)
 2・3 : 長原 SX701
 4・5 : 大庭寺 TG232号窯灰原下層
 6 : 大庭寺 TG232号窯灰原

大庭寺 TG232号窯灰原には、当該窯の築窯・稼働期と土師器型式との併行関係を直接的に示す資料がみられる。灰原下層の第59層直上から布留甕 2点 (図11 - 4・5)、灰原から複合口縁壺が (図11 - 6) 出土している。そして、藤田は、布留甕 2点は並べられたような状態で検出、投棄が意図的に置かれたか解釈の余地が残るが、大庭寺 TG232号窯灰原形成直前のことであったことは疑いない、とする (藤田1995)。直前がどの程度の直前なのかの評価は分かれるが、当該型式の幅の中で大庭寺 TG232号窯が築窯されたとするのが藤田の文意に即した理解のようにも思われる。森岡・西村は当該資料を大庭寺 TG232号窯の直前型式とする。西村・池峰、杉本、辻、松本も該期までは遡らせていない。

布留甕 (図11 - 4) は、ハケ調整の規範を崩したもので、とできる。は漆町11群にはみられる型式である。ただ、沖町遺跡での型式Ⅵよりは、わずかであっても崩れた印象をもつ。もう一点の布留甕 (図11 - 5) は、ハケ調整ではとできようが、プローションでは、加賀地域では一般的な型式とはできず、詳細な比較はできない。対して、当該資料と併行関係にあるとした八尾南

SE22の布留甕 (図10 - 1) は、沖町遺跡の型式Ⅵとも比較できる型式の特徴をもち、であるが後出とできる。些細な比較は差し控えるべきとも考えるが、漆町11群併行の可能性を含めた上で、漆町12群古相には確実にのぼる型式とみたい。また、灰原から出土した有段口縁壺は、藤田も指摘しているように層位関係とは逆に古い様相をもつ (藤田1995) ように思われる。当該壺は、山陰系とは特定できないが、漆町12群古相ないしはより古いとみても齟齬はないように思われる。

大庭寺 TG232号窯の築窯時については、以上のように意見が分かれる。藤田は、列島での須恵器生産の開始について、大庭寺 TG232号窯は最古型式ではないとし、小若江北式以前にさかのぼる可能性が高いとしている (藤田1995)。このことの議論はできないが、大庭寺 TG232号窯より古い型式の須恵器の存在は確実視されている。森岡・西村は、併行関係の検討の中で河内34期を須恵器の出現

の直前としているが（森岡・西村2006）先にも触れたように杉本は河内32期に遡上する可能性さえ指摘している。畿内の大方の理解に即しても、遅くとも漆町12群の古相段階には須恵器生産が開始されていたとの理解は可能であろう。

以上、大庭寺 TG232号窯関連の土師器をみてきたが、大庭寺 TG232号窯灰原下層 長原 SX701 大庭寺谷部 1（393 - OL）第Ⅶ層下層の推移は大方が認めるところであろう。そして、これら土器群は漆町12群と併行し、その下限は大庭寺谷部 1（393 - OL）第Ⅶ層下層の布留甕の段階に求めておきたい。

漆町13群との併行関係では、辻は、辻編年3段階の特徴として、椀形高杯が加わり除々に割合を増す。壺では粗製の小型壺や大型の壺の大半が姿を消す。杯・椀類は種類を増し、とくに口縁部が外反する杯や椀形高杯の脚部を欠いたような椀が広くみられる、等々をあげている（辻1999）。これらの指摘は、椀形高杯に関しては加賀の形式との対応関係で検討の余地を残しているが、漆町13群の古い段階からはじまる特徴と、良く一致する。辻編年3段階と漆町13群古段階とが併行関係にあることは動かないし、先での漆町12群との併行関係とも齟齬はない。ただ、辻は該期での須恵器との併行関係を TK73型式から TK216型式としており、漆町編年では、漆町13群の古い段階を TK216型式頃⁽⁸⁾とみている。⁽⁹⁾ 整合しない。

2 併行関係と課題

漆町編年と畿内、森岡・西村編年との対応関係を、上記での検討を踏まえ表3のように整理した。線引きは、文字通り区分が一線で画され悩ましいが、微妙な線引きはかえって理解を曖昧にするとの判断から主たる併行時期で線引きした。本文を参照いただきたい。そして微妙な違いが大きな意味をもつ場合もあろう。これらに関しては、今後とも検討を進めたい。また、上記では、東海をはじめとした、他地域形式を介した検討はほとんどしていない。この後、東海をはじめ東日本の編年と漆町編年との併行関係の検討を進めるが、そこでの結果とリンクさせることで、畿内との併行関係を再検証していくこととしたい。

1) 庄内式と白江式

先では、庄内式古段階が漆町4群とほぼ併行するとした。このことは、庄内式古段階が、漆町3 - 2群の一部を含むとしても、その上限が漆町4群を大きく遡らないことを示すとしたい。下限については、漆町6群の下限が布留式古段階前半と接触するとした。漆町4群から漆町6群は、筆者が設定する「白江式」にあたる。この結果は、森岡・西村の「庄内式」と「白江式」が、概ね時間軸を共有した土器様式であることを示す。「庄内式」と「白江式」の対比が可能となった。なお、庄内式には、庄内甕出現以

表3 畿内との併行関係

畿内編年 森岡・西村（2006） 西村（2008）		漆町編年	
庄 内 式	古 段 階	古相	漆町4群
		新相	
	中 段 階		漆町5群
新 段 階		漆町6群	
布 留 式	古 段 階	古相	漆町7群
		新相	
	中 段 階	古相	漆町8群
		中相	漆町9群
		新相	漆町10群
	新 段 階	（古相）	漆町11群
（新相）		漆町12群	
中 期			漆町13群

前を含める理解があることは、周知の通りである（寺澤1986他）。この段階については、漆町3 - 1群・3 - 2群（月影式）と対応させ、その推移を弥生Ⅴ様式とも関連させて検討を進めたい。

庄内甕は、庄内古段階に出現、中段階には器形が安定し、出土量も卓越する（西村2008）。対して月影甕は、漆町3 - 1群には出現し、遅くとも漆町3 - 2群には普遍化する。月影甕は、庄内甕の出現と普遍化で先行するとできる。今更ながらであるが、庄内甕の成立時期に見通しを得た。漆町4群併行期には、「能登形甕」が普遍化をはじめ、北陸北東部での地域甕として定着するが、その時期は、庄内甕の成立とほぼ同時期とできる。地域甕の成立は、それぞれの地域での動きを評価する重要な事象といえる。今後、東日本での各地域甕の成立時期の整理を進めていくが、地域甕成立の階梯整理に一步踏み出せた。

2) 漆町6群と漆町7群

先では漆町6群を庄内式中段階後半から新段階、漆町7群を布留式古段階に併行するとした。纏向辻土坑4下層段階と中田一丁目土坑2段階の間で庄内式と布留式を区分する理解は、纏向編年（関川1976）がすでに指摘していたことであるが、森岡・西村は、その後提示された布留0式（寺澤1986）等の検討も踏まえ、該期で区分した。辻土坑4下層段階を庄内式としたことについての畿内編年での議論はできないが、漆町6群と漆町7群の画期と一致した。加賀以外の地域を含めての併行関係の検討を通じて、この区分の有効性を検証していきたい。

一方、該期の下限は萱振SE03段階とした。従前の編年観では、萱振SE03段階から布留Ⅰ式と評価されていた。典型的な布留式の成立が、一時期新しい段階に設定されたともいえる。このことにより漆町7群はその「新」も含め、布留Ⅰ式をまたぐことなく、布留式古段階に収まった。

筆者は、辻土坑4下層段階と中田一丁目土坑2段階との布留祖形甕の型式的細分や、その間にどれほどの時間差があるのかも理解できず、加賀での甕Ⅰ類と布留0式期での布留祖形甕の対応関係、ひいては布留0式での拡散の時期と実態（寺澤1987）を評価できずにいた。今もさほど状況は変わらないが、今回、漆町6群の最新段階を中田一丁目土坑2の段階と接触するとしたことで、辻土坑4下層段階での布留祖形甕は少なくとも定量的に波及していたとはできず、加賀の月影系形式の最後は、中田一丁目土坑2の段階の布留祖形甕をはじめとする畿内（近畿）等からの土器移動の段階であろうとの理解を、結果として得た。西日本にみられる布留祖形甕の時期と波及地域がどのように整理できるのか知りたい所である。

3) 漆町8群から漆町10群

森岡・西村は布留式中段階を設定し、古相、中相、新相に細分した。漆町編年との併行関係では、古相が漆町8群、中相が漆町9群、新相が漆町10群にあたるとした。

布留式中段階の設定では、中でも、従前、布留1式（寺澤1986）に包含されていた平城下層・朝集殿溝下層段階（奈文研1981）を中相として抽出・再編、布留2式の標式とされてきた小若江北式段階を新相とし、布留式中段階の一連の動きの中に位置づけたことを評価したい。新相にあたる小若江北式段階は、布留型形式と組成推移の完結期で、該期と連動する動きは東日本においてもあまりに顕著なことから、通常、様式的画期として扱われ、それ以前とは明確に様式区分されることが多いのは周知の通りである。中相段階を踏まえた厳密な様式理解の見直しを促すこととなる。

対して、古相にあたる漆町8群は、中相、新相とともに布留式中段階の中で評価されることとなった。従来の布留1式が分解され、布留式古段階と中段階の様相に組み替えられることとなったのであ

る。このことにより、布留Ⅰ式に与えられていた布留様式の「完成期」との評価は、中段階に付与されることとなったように思われるが、中相以降、少なくとも新相を含めて「完成期」とする評価は、なじまないように思われる。布留式中段階は、語弊もあろうが、古相は確立期ないしは端緒、中相がその展開期、新相が完結期、論者によっては衰退期として、いきおい評価されることになるのではなからうか。西村は、布留式全体を要約し、布留式古段階を揺籃期、中段階を完成期、新段階を衰退期の端緒、と捉えている（西村1996）。これら評価は別にしても、様式の階梯的な理解は中段階の推移の中でも、評価は異なっても敷衍される。漆町編年では、漆町8群を布留式古段階相当様式に含め、漆町9群（中段階中相）をそれ以降と一括し、布留式併行期を二分した。漆町8群はその帰属様式と評価で異なることとなった。

布留式中段階古相は、布留形器台の成立を指標の一つとしているように（森岡・西村2006）、細別型式はともかくとしても布留式の形式が揃うとできる。このことを評価してのことと思われるが、西村は、先で触れたように布留式中段階を「完成期」としている。この評価こそが、中段階古相の様式的帰属と係わっていると考える。しかし西村は一方で、複合口縁壺は、「中段階古相まで存続するが、その後は急速に衰退して中段階中相の組成から脱落する。」「この後は儀器化が進んで埴輪に変質し展開することになるため、土器組成から消失するのであろう」（西村2008）とし、中段階中相を評価する。漆町編年では、漆町8群での小型三点セットの定型化等を、「はじまり」としてではなく、庄内期からの土器祭式の「帰結」と評価した。西村の中段階中相からの「埴輪への変質」との指摘は、まさに中段階古相での「帰結」、中相での新たな「展開」の評価と係わるとみたい。該期での土器による祭式の転換と評価したい。

西村は、このことも含め、布留式中段階中相での組成、形式・型式変化について多く触れている（西村2008）。長くなるが、いくつかについて引用する。

甕は、「布留形甕が主体で、口縁部は拡張されて内傾する典型的なものに落ち着いてくる。」「庄内甕も・・・中略・・・個体数を減少・・・中略・・・布留祖形甕のグループは・・・中略・・・布留形甕、庄内形甕以外の八ヶ甕に変質したという見方が正しいかもしれない。」「庄内系高杯Aは、「杯部に対して口径が縮まり・・・略・・・庄内期に比べて縦長の印象が強くなってくる。」「布留系高杯は、「中段階古相までは数も少なく稀な器種である。しかしそれ以降は急速に普及」する。」「小型丸底土器Bは、「中段階中相にはいわゆる小型丸底壺形態を獲得して数量的にも増加する。」「とする。

また、下田Ⅲ式と朝集殿溝下層との組成を計量的に対比し、朝集殿溝下層段階での大きな変化を指摘している（西村1996）。煩雑になるので詳細は註10に譲るが、該期でのいわゆる長脚屈折高杯（有稜高杯C）は、高杯構成比で17.5% 66.7%に増加。小型丸底壺（小型丸底壺C）は、2.8% 96.5%に増加するとする。下田Ⅲ式は布留式古段階も含んでおり、この組成比を中段階古相と中相との差異と扱うことはできないが、中相での変化を窺うには十分と考えている。そして、西村は、「平城京下層SD段階では、下田Ⅲ式に残留した弥生・庄内系の甕などがほぼ払拭され、・・・中略・・・布留式の土器組成が、より純粋な形に昇華される段階として捉えられる。」等々と指摘する。

これら記述は、布留式中段階中相に形式淘汰が大きく進んだことを指摘するものといえよう。同時に、その変化は、布留式中段階古相との比較のみではなく、庄内期からの形式が該期で衰退しているのである。西村の記述からは引用できなかったが、庄内系の小型器台（小型器台B2 西村2008）の消長も然りである。

なお、布留式中段階中相に「型式」を確立する形式は少なくないとみている。西村の「小型丸底壺形態を獲得し」た小型丸底土器Bや長脚屈折高杯等がそれに当たる。そして、小型丸底土器Bは、

庄内期からの「型式」変化の中でとらえているが、「形式」変化の可能性、あるいは他地域形式からの受容ないしはインパクトによる変化であった可能性も捨てきれない。定見を用意できないが、仮に、そのような理解が可能ならば、布留式中段階中相の様式理解は一層容易になる。

さらに、西村は、布留式の様式的特徴を庄内式と比較し、「布留式は地域性を払拭するように、土器文化のより基層部分まで浸透するのが大きな相違である。」としている。庄内式との対比では全く同感であるが、その特徴が、おしなべて布留式全体の特徴とできるのか。布留式の各段階ごとの特徴やその変化、布留系形式の各地域への波及状況、地域での受容のあり方等々の具体的検討を今後とも進めなければならない。そして、布留式中段階の設定、細分は、まさに、このことと大いに関係してくるはずである。

再三触れているが、漆町8群は布留系形式は定着するが、主に漆町5群以降に波及した外来系形式も併存。漆町9群は一層の布留系形式波及の一方で、他の外来系形式を急速に払拭。漆町10群は、育一化した布留系形式からなるとし、畿内系以外の形式の払拭がはじまる漆町9群に質的転換をみて画期とした。布留式中段階での地域性の払拭が、段階的に推移したのか、その間に質的变化を伴っていたのか。

いずれにせよ、森岡・西村編年と漆町編年では、布留式中段階古相の帰属、様式区分で異なるが、以上でみたように中相段階での変化・特徴についての詳細な検討がみられ、中相の評価は、漆町9群と相違はみられず、むしろ一致する部分が多いとさえ理解している。ここでの議論を「はじまり」か、「帰結」かに集約するつもりはないが、布留式中段階古相の帰属は、まさに、「はじまり」か「帰結」かの評価と係わっているようにも思われる。

4) 漆町11群と布留式新段階

漆町11群の画期は、機能の転換を伴うBタイプの土器食器の変革期、土器食器様式からは律令型土器様式の端緒と評価している(田嶋1995)。畿内との併行関係では、森岡・西村編年(森岡・西村2006)に即せば、漆町11群が布留式新段階古相、漆町12群が同・新相と概ね併行し、下限は「中期」と一部重なるとした。

森岡・西村は、布留式新段階と「中期」を区分する指標について多くを語っていないが、その中で、「河内34期の直後が陶邑窯跡群における須恵器出現期と捉えて、31~34期を布留式新段階に区分する。」(森岡・西村2006)としている。誤解があるかも分からないが、須恵器窯の出現をもって「中期」とし、出現前を布留式新段階としたとも、とれる。確かに、須恵器の出現は土器様式と大きく係わる重要な要素であり、該期での様式区分の大きな指標であることができる。しかし、須恵器出現時期の現状での認識では、布留式新段階古相での小型精製三種の欠落や、残存している布留系形式の形骸化を説明することはできない。同時に、小型精製三種を欠いた組成が布留式、布留様式とできるのかについても別に説明を用意する必要がある。

辻は、布留式新段階併行期から古墳時代中期の土師器とする。該期を「土器の粗製化と器形の減少がとくに進んだ点で、それ以前とは一線を画する」とする(辻1999)。管見の範囲であるが、畿内の土器を対象に該期を明確に画期とした数少ない見解とできようか。また、寺澤は、布留3式以降を「布留Ⅱ様式」、布留2式以前を「布留Ⅰ様式」として大別する(寺澤1986)。寺澤は共に布留式の名称を用いているが、布留Ⅲ式に画期を求めていると、とれる。畿内での議論を期待したい。

5) 布留式という「型式」名の扱いについて

布留Ⅲ式・Ⅳ式、場合によっては布留Ⅴ式も、森岡・西村の編年に限らず、畿内では「布留式」と冠される。該期が須恵器も含めた食器組成の大きな変革期に当たっていることを承知の上で、布留式とされているのであろうが、森岡・西村の編年を例にすれば、古段階、中段階、新段階として区分しており、様式としての階梯と判断されてもしかたのない表記となっている。たしかに、須恵器が出現する段階以降を古墳時代中期とし、従来の布留式の様式区分に検討を加えているのは確かであるが。

研究史のある地域での「型式」名の扱いは難しい。ましてや型式名となった遺物群の時期が、今日的な様式理解の枠の主要位置から外れた場合は、一層悩ましい。筆者は、様式の画期区分にあわせ「型式」名を変更、伸縮させてきた。口頭ではあるがそのことへの批判も聞いている。「型式」名は、弥生時代、古墳時代の区分ほど大仰なものでないにしても、よく似た扱いが必要と考えている。何らかの取り決めが必要とも考えている。筆者の「型式」名の扱いの反省も含めて、布留式がそうであると決めつけないが、符丁としての扱いであると済ますのでは問題は解決しないであろう。そのことを踏まえても、布留式古段階、中段階、新段階との表記は検討の必要があろう。

本稿を書くにあたっては、多くの方々、機関より、ご教示とご配慮をいただいた。末筆ながらここに御礼申し上げます。

註1 「布留祖形甕」をはじめとした当該甕形土器の呼称に関しては諸論があり整理して使う必要があるが(市村2004b)、未消化である。畿内との併行関係を森岡・西村編年に沿って進めるので布留祖形甕の呼称を用いることとするが、便宜的に布留形甕Aも布留祖形甕に含める(西村2008)。

註2 堀は、白江式から漆町7群にかけての畿内との併行関係について、堀編年・白江2～3式での布留祖形甕の供伴と、白江式(中でも2式)の高杯が、唐古・鍵(13次)SD05で布留0式と供伴するとし、白江1式を寺沢・庄内3式、白江2～3式を布留0式、漆町7群相当期とする長泉寺・古府クルビ1式を布留Ⅰ式併行とした(堀2006)。堀編年での白江式は、概ね漆町6群と漆町7群からなるもので、漆町編年とは時間軸と時期幅、その様式設定と概念で異なる(田嶋2006)。様式概念が異なることは堀も述べている。

なお、白江式については、漆町4群段階を月影形式は移動するが、あまり外来形式がみられない段階。漆町5群段階を外来形式が波及する段階。漆町6群段階を、一層の外来形式の波及と在来形式の弛緩が顕在化する段階、として整理している。

註3 月影甕の規範を明らかに喪失した一群の型式を「月影系甕」とした。月影甕に系譜をもつことは間違いないが、月影甕の型式とは区別した。擬凹線文をもたない形式の型式分類はしていないが、ここでは擬凹線文をもつ形式の分類結果(田嶋2006)を敷衍させた。

註4 V様式系叩き甕は、白江式の段階にも多くはないがみられる。しかし、漆町6群の新しい段階ないしは漆町7群がはじまる段階で、甕組成の一翼を担う頻度で出土する遺跡が出現する。そこには、白江式でのV様式系叩き甕の波及とは異なった事情があったと考える。

註5 沖町遺跡は、北陸北東部の「くの字」甕土器圏に隣接してある。その点で、南加賀では布留甕のみからなる漆町10群併行期でも「くの字」甕が定量みられた可能性が高いと予測している。が、布留甕を凌駕するまでの「くの字」甕の増加は、該期での動きとみたい。

註6 青木勘時氏にお世話頂き実見。

註7 このことは、加賀での年輪年代の成果とも係わるので、付言しておく。

堀は年輪年代の成果を引用して、法仏式(漆町2群)の下限をAD140とし、風巻・月影式をAD140~220の間とする(堀2006)。根拠は、大友西SE18(金沢市2002)の年輪年代AD169を風巻・月影Ⅱ式の暦年代とし、出土資料では時期の特定の難しいSE14(金沢市2002)の年輪年代AD145を、法仏式との間の風巻・月影Ⅰ式の存続時期幅を勘案・案分し、法仏式下限の暦年代にあてたようである。月影式下限の暦年代の根拠に関しては省略する。

大友西SE18の甕形土器(金沢市2002 94ページ、第105図5)は、漆町3-1群とみるが、型的には漆町2-2群に遡っても良い。そのことから当該井戸の構築は、漆町3-1群、堀編年によるならば風巻・月影Ⅰ式を下るものではない。堀とは、大友西SE18の年輪年代AD169の扱いで異なる。

森岡・西村の「庄内式古段階」のはじまりは、本文での漆町編年との併行関係が妥当とできるなら、大友西SE18の年輪年代AD169との間に漆町3-1群、漆町3-2群の存続期間を加味する必要がある。この操作での想定年代は、森岡・西村が示した「庄内式古段階」開始期の暦年代(森岡・西村2006 第13表)と大きな矛盾はないとできる。

註8 漆町13群では、「ON46型式からTK23型式にかけての供伴例が多い」とした。これらは漆町13群でも新相(金屋サンパンワリ97土坑段階)の供伴事例で、古相(金屋サンパンワリ157土坑段階)の供伴事例はない。古相はON46型式よりは遡上しTK216型式あたりと併行と想定しているがTK73型式までのぼるとするのは難しい。その場合は、漆町12群での須恵器との併行関係とも整合しなくなる、と考えている。

註9 辻は、辻編年3段階の標式とする大阪市・城山SX0743、大阪市長原SE703、同・SD701での須恵器の供伴を、「主体がTK216型式段階と考えられる」としており、「整合しない」としたが大きな齟齬はないとも考えている。今回できなかったが、該期での組成整理を踏まえた一括資料での検討、大庭寺谷部1(393-OL)第Ⅶ層下層にみた布留甕の様式的帰属の再考等、の作業を進めたい。

註10 下田Ⅲ式と朝集殿下層溝段階との組成について、有稜高杯C 17.5% 66.7%、有段鉢59.4% 92.0%、小型器台C 2.8% 96.5%、布留祖形甕と布留甕(祖形甕大半)76.3% 布留甕 56.6%等に変化するとする。

引用・参考文献(論文等)

- 青木勘時 2000 「S字甕・二重口縁壺集成 奈良県」『S字甕を考える』第7回東海フォーラム三重大会
2006 「第Ⅰ部 古式土師器の編年集成 大和地域」『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター
- 青木元邦 1994 「第5章 第3節 古式土師器の変遷」『長泉寺遺跡』福井県教育庁
- 赤塚次郎 1990 「廻間式土器」「土器・土器群の形成」『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
1994 「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 安達厚三・木下正史 1974 「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』60巻第2号
- 甘粕 健・春日真実 1994 『東日本の古墳の出現』山川出版社
- 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993 『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』
- 石野博信・関川尚功 1976 『纏向』桜井市教委
- 市村慎太郎 2003 「畿内および一部周辺地域における北陸系土器」『庄内土器研究』27
2004a 「畿内の越系土器」『邪馬台国時代の越と大和』香芝市教委 香芝市二上山博物館
2004b 「庄内式・布留式における甕形土器の呼称に関する整理」『大阪文化財研究』第26号(財)大阪府文化財センター
- 植田文男 1994 「湖東北域の近江系について」『庄内土器研究』6
- 大野英子 2003 「越中中央部における古墳出現期の土器様相」『庄内土器研究』26
- 加納俊介 1991 「土師器の編年4 東海」『古墳時代の研究』6 雄山閣
- 北浦大輔 2000 「古墳出現期の広域編年」『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会

- 小西昌志 2002「第六章 まとめ」『千田遺跡』金沢市教委
- 杉本厚典 2003「河内における布留式期の細分と各地の併行関係」『古墳出現期の土師器と実年代』(財)大阪府文化財センター
2006「第Ⅰ部 古式土師器の編年集成 河内地域」『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター
- 関川尚功 1976「纏向遺跡の古式土師器」『纏向』桜井市教委
1994「加賀と大和の土器編年」『庄内土器研究』5
- 高野陽子 2003「第5章 第1節 出土遺物の検討」『京都府遺跡調査報告 第33冊』京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 田嶋明人 1986a「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県教委
1986b「古墳出現期の土器群と「月影式」土器」『シンポジウム「月影式」土器について(報告編)』石川考古学研究会
1987「2遺構・遺物の検討」『永町ガマノマガリ遺跡』石川県教委
1995「土器と古墳時代」『北陸古代土器研究』第5号 北陸古代土器研究会
2006「白江式再考」『吉岡康暢先生古希記念論集』桂書房
2007a「北陸の古墳編年の再検討 第2部 古墳編年と土器編年との対応関係」『阿尾島田古墳群の研究』富山大学人文学部考古学研究室
2007b「法仏式と月影式」『石川県埋蔵文化財情報』第18号(財)石川県埋蔵文化財センター
- 田中清美 1999「SE703出土韓式系土器と土師器の編年的位置づけ」『長原遺跡発掘調査報告Ⅶ』(財)大阪市文化財協会
- 辻 美紀 1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』
2002「河内地域における古墳時代中期の土師器」『長原遺跡発掘調査報告Ⅸ』(財)大阪市文化財協会
- 寺澤 薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』榎原考古学研究所
1987「布留0式土器拡散論」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ
- 栃木英道 1994「能登地域の庄内並行期の土器群の変遷」『庄内土器研究』7
- 松本百合子 2001「第Ⅳ章 第2節 土壇状遺構と出土土器の編年的位置づけ」『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅳ』(財)大阪市文化財協会
1995「第6節 TG232号窯灰原下層出土の土師器」『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』大阪府文化財調査研究センター
- 小田木治太郎 1992「布留遺跡豊井(打破り)地区発掘調査中間報告」『天理参考館報』第5号天理大学出版部
- 北島大輔 2000「古墳出現期の広域編年」『S字襷を考える』第7回 東海考古学フォーラム三重大会
- 西村 歩 1996「第6章 第4節 下田Ⅲ式を巡って」『下田遺跡(第二分冊)』(財)大阪府文化財調査研究センター
- 西村 歩・池峰龍彦 2006「第Ⅰ部 古式土師器の編年集成 和泉地域」『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター
- 西村 歩 2008「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和』香芝市教委、香芝市上山博物館
- 広瀬和雄 1991「第3章 前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 中国・四国編』山川出版社
- 藤田憲司 1995「第Ⅶ章 第6節 TG232号窯灰原下層出土の土師器」『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』大阪府教委
- 堀 大介 2002「古墳成立期の土器編年 - 北陸南西部を中心に - 」『朝日山』朝日町教委
2006「第Ⅰ部 古式土師器の編年集成 越前・加賀地域」『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター
- 森岡秀人・西村 歩 2006「第Ⅳ部 総括」『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター
- 谷内尾晋司 1983「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会
- 米田敏幸 1981「第2節 古墳時代中期の土器について」『八尾南遺跡』八尾南遺跡調査会
1986「中田1丁目39出土土器」『八尾市文化財紀要2』八尾市教委
1991「土師器の編年 1近畿」『古墳時代の研究 6』雄山閣

1994「河内における庄内式土器の編年」『庄内土器研究』7

1997「庄内式土器研究の課題と展望」『庄内土器研究』14

吉岡康暢 1991『日本海域の土器・陶磁（古代編）』六興出版

引用・参考文献（報告書等）

石川県立埋蔵文化財センター 1987『永町ガマノマカリ遺跡』

石川県立埋蔵文化財センター 1988『白江梯川遺跡Ⅰ』

石川県立埋蔵文化財センター 1991『畝田遺跡』

石川県立埋蔵文化財センター 1989『漆町遺跡Ⅲ』

石川県立埋蔵文化財センター 1998『金沢市額谷遺跡』

大阪府教委 1981『大園遺跡発掘調査概要・Ⅳ』

大阪府教委 1983『萱振遺跡発掘調査概要・Ⅰ』

大阪府教委 1986『成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅰ』

（財）大阪文化財センター 1987『久宝寺北』

大阪府教委 1995『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』

大阪府教委 1996『陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ』

大阪府教委 1999『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』

（財）大阪府文化財センター 2003『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅴ』

（財）大阪府文化財センター 2004『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅵ』

（財）大阪府文化財センター 2005『船橋遺跡Ⅱ』

（財）大阪府文化財センター 2007『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ』

（財）大阪市文化財協会 2001『長原遺跡発掘調査報告Ⅳ』

（財）大阪市文化財協会 2003『長原遺跡発掘調査報告Ⅵ』

近江町教委 1994『黒田遺跡3』

岡山県教委 1996『津寺遺跡3』

金沢市教委 1983『金沢市二口六丁遺跡』

金沢市教委 1984『金沢市田中B遺跡』

金沢市教委 1985『金沢市新保 - 本町東遺跡西遺跡』

金沢市教委 1985『金沢市南新保D遺跡』

金沢市教委 1987『金沢市押野西遺跡』

金沢市教委 1992『沖町遺跡』

金沢市 2002『大友西遺跡Ⅱ』

金沢市埋蔵文化財センター 2002『金沢市千田遺跡』

京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003『京都府遺跡調査報告 第33冊』

堺市教委 1991『堺市文化財調査概要報告 第18冊』

富山大学人文学部考古学研究室 2007「北陸の古墳編年の再検討」『阿尾島田古墳群の研究』

奈良国立文化財研究所 1980『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』

奈良国立文化財研究所 1981『平城京発掘調査報告Ⅹ』

福井県教育庁 1994『長泉寺遺跡』

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1994 『光源寺遺跡』

福井市教委 1996 『今市遺跡』

八尾南遺跡調査会 1981 『八尾南遺跡』

(財)八尾市文化財調査研究会 1988 『小阪合遺跡』

(財)八尾市文化財調査研究会 1995 『中田遺跡』

石川県埋蔵文化財情報

第20号

発行日 2008(平成20)年10月31日

発行 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920 1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076 229 4477 FAX 076 229 3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 橋本礎文堂

© (財)石川県埋蔵文化財センター